伊丹城跡発掘調査報告書Ⅱ

昭和52年3月

伊丹市教育委員会

序

昨50年度の第１次発掘調査で、伊丹城跡は予想外にその遺構がよくのこされており、しかも、荒木村重の有岡城はもとより、その下層に伊丹氏時代の伊丹城、さらに築城前の伊丹氏居館時代の層まで検出できることが明らかになりました。くわえて南郭では古墳時代の生活面すら検出できました。この成果をふまえて、今年度は国庫補助金を受け、第２次調査として推定本丸跡および西郭の北部を発掘しました。

国鉄福知山線複線化に伴なう伊丹駅前整備事業は、計画着手以来10有余年にわたるものであり、着工に前後して生じた伊丹城跡の遺構発見は、新たに「開発と保存」をめぐる大きな問題となりました。第２次調査に先立つ協議で、調査終了後ただちに日程のおくれている道路拡張工事すなわち城跡部分の削平工事に着手する旨の結論を出し、炎天下50日近い発掘調査が行なわれました。ところが、この調査で本丸跡の有岡城石垣をはじめ、本丸跡・西郭それぞれより建物跡、さらに庭園遺構、下層の伊丹城時代の建物跡が、おびただしい貴重な遺物を伴なって検出されるに至り、調査・工事関係者をはじめ各方面から、この貴重な遺構の保存と当初の工事計画をいかに両立させるかについて、再び関心が高まりました。調査終了後、故伏見正慶市長の裁断で、着工を延期し、遺構の保存と工事計画についての再検討を年度末までかけて行なうことになりました。８月末以降、今日まで関係者各位により幾度にもわたる協議が続けられてきました。しかし、伏見市長が３月１日に急逝されたことにより、最終的結論に至るには少し時日を要することとなっています。このような時にあたり、51年度の貴重な調査成果が、報告書としてみなさまのお手元に届けられることを喜びたいと思います。

おわりに、遺跡の保存に多大の配慮をされた故伏見市長のご冥福を祈るとともに、調査および報告書の作成にご協力頂いた調査団長鈴木先生をはじめとする関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。

昭和５２年３月３１日

伊丹市教育長　戸　田　龍　馬

目　　次

Ⅰ　発掘調査の経過……1

Ⅱ　遺構の解説……2

1　本丸地区

2　西郭地区

Ⅲ　遺構の考察……7

Ⅳ　遺　　物……9

Ⅴ　石造美術……10

Ⅵ　図　　面……20

1　調査地区図

2　遺跡実測図

3　遺物実測図

4　石造美術実測図

Ⅶ　図　　版……35

1　遺跡写真

2　遺物写真

3　石造美術写真

凡　　例

本報告書は伊丹市教育委員会が国庫および県費補助金を得て４００万円で行なった昭和５１年度伊丹城跡発掘調査の報告書である。本報告書の執筆は伊丹城跡調査団（団長　鈴木　充）が担当した。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを鈴木　充、Ⅳを橋本　久が分担し、Ⅴをとくに福沢邦夫氏に執筆依頼した。図は鈴木　充・織田誠一郎・中田興吉が作成し、写真は遺跡を鈴木　充、遺物を和島恭仁雄・橋本　久が撮影し、石造美術の図・写真は福沢邦夫氏の提供による。

伊丹城跡発掘調査報告書Ⅱ

Ⅰ　発掘調査の経過

１．調査の組織

伊丹城跡第２次発掘調査は、昭和51年度に、伊丹市費２００万円、国庫補助２００万円、合計４００万円の費用をかけ、伊丹市教育委員会が行った。調査にあたっては、団長に鈴木充（大阪市立大学講師）を委嘱し、調査員として橋本久（大阪経済法科大学助教授）中田興吉（神戸大学大学院・日本史）織田誠一郎（大阪市立大学大学院・建築史）五十川伸矢（京都大学大学院・考古学）の参加を得た。また、事務は伊丹市教育委員会社会教育課（課長柳正夫、係長木原　務、係坂根憲治）が担当した。調査は主として伊丹近郊に在住する学生の手によって行ったが、伊丹市都市計画部国鉄駅前整備室、神戸大学考古学研究会、大阪経済法科大学考古学研究会、伊丹市立中学校教員の有志、笹原ライオンズクラブなどの協力を得、地元の大手町自治会（会長吉田昌功）や伊丹市文化財保存協会、伊丹地方史学会や株式会社染の川組などから、さまざまな形で援助を受けた。記して感謝の意を表したい。

２．調査の経過

第２次調査の対象地は、城跡の北西部にあたる旧金光教会敷地と、駅前を西にのびる道路をはさんだその南側、および、旧荒村寺の敷地について行う予定であったが、荒村寺の立退が遅くなったため、この部分は今回の調査予定から省いた。なお調査予定地については、旧金光教会跡地を本丸地区、荒村寺北の道路部分を西郭地区と仮称した。

調査地は、第一次調査の経験から、全体にかなり厚く盛土がなされていることが予測されたため、全域にわたって壺堀を行い、下層の状況を確認してから、厚さ60cmの表土をパワーシャベルを使用して排土した。ただし、土塁の近くはすべて手掘で行うことにした。

現地での調査期間は、７月１日から８月１５日までの1.5ケ月を予定した。作業の進行状況は、おおむね下記の通りである。

７月　１　日　作業開始。除草。本丸地区に３ｍ間隔に地区設定。
　　２　日　本丸北部の表土排土。
　　５　日　本丸北部の遺構検出。
　　７　日　本丸北部の遺構検出と同時に南部の表土排土。
　　９　日　本丸南部の遺構検出。
　　１２日　本丸石垣の清掃。南部で遺構検出。

７月１５日　西郭地区に３ｍ間隔の地区を設定。表土排土。
　　１８日　西郭の遺構検出。
　　３１日　本丸地区、西郭地区とも遺構検出終了。
８月　１　日～　３　日　写真撮影。
　　３　日　西郭地区実測準備。
　　５　日　西郭実測開始。本丸地区実測準備。
　　６　日　本丸実測開始。
　　７　日　現地説明会。
　　１４日　実測終了。
　　１５日　略埋戻し。用具撤収。現地調査終了。

なお、調査地は調査終了後、国鉄伊丹駅前整備のため、引続き土取りの作業が行われる予定であったため、埋戻し作業を考慮していなかった。しかし、検出遺構の重要性から、遺構を保存できる可能性もあるため、検出遺構には砂を入れ、薄く土を盛った。また、調査地全体には、仮設の柵を設け、保存している。

Ⅱ　遺構の解説

１．本丸地区

１．本丸地区の地形

本丸地区は伊丹城跡の北三分の一を占めていたものと思われるが、現在では東側三分の二は、国鉄福知山線の線路と、駅前道路のために削り取られ、西側三分の一ほどがかろうじて残存している。この部分は伊丹段丘の東縁にあたるところであり、猪名川西岸の平坦部とは約６ｍの高低差がある。しかし、段丘上とはあまり高低差はなく、本丸内が１ｍ余り高いだけである。伊丹の町があった段丘面と本丸の間には深さ６ｍ余りの堀があったが、いまは完全に埋立てられ、西北隅の段丘が落込んだ部分にわずかに昔の堀の岸が残っている。

本丸の敷地は、国鉄伊丹駅から西にのびる街路を通すために南側が切開かれている。この道から北は、金光教会の敷地になっており、その時の登り路が南側の中央部に設けられていた。旧金光教の敷地内は、西側に高さ3.5mの土塁跡が南北に続き、北西角で5.5mの高さに達している。土塁跡は、ここで東に折れ曲っているが、東へ１０ｍいったところで途切れ、そこには北側の崖際まで教会の建物が建てられていた。このほか、敷地の南西部にも木造平家建の建物があった。

旧金光教会敷地の北側は落込むように急な斜面になっており、東側は後で削られたため、傾斜はややゆるく、ともに樹林でおおわれている。

２．土塁および石垣

土塁の内側は、長い歳月の間にかなり崩れ、三分の一ぐらいの高さから下は、崩れた土が堆積して、東へ向ってゆるく傾斜していた。また、斜面や土塁上には、多数の雑木が成育しており、北西隅の一番高いところには、巨大な椋樹が枝をのばしている。土塁の調査は北西隅から北側と、南端近くで裾の部分を中心に、発掘を行った。

まず、土塁西北部では、土塁が直角に折れ曲る入隅の部分になるため、上部の堆積も多く、約1mの深さまで、雑多な道具片を含む腐触土で覆われていた。これらの表土層を除去したところ、そこから下は黄味を帯びた褐色土層になり、中に拳大の玉石が多数混入している。この段階で、すでに東端近くでは石垣の最下段の石が検出されており、前述の玉石は土塁表面の石垣が崩れた時の裏込めの石であることがわかった。この褐色土は西で深く（６０㎝ぐらい）東にゆくほど浅くなっている。

玉石を含んだ褐色土層を除去したあたりで、すでに北側と西側に、土塁の石垣がかなり露出してきている。ここから下は石垣が崩れた時の石が多量に散在し、その間には黄味がかった褐色土が、拳大の玉石と大量の瓦片とともに詰っていた。瓦片は巴文をもった丸瓦と平瓦で、火にあった形跡はなく、割口の磨耗もないところから、廃棄された時の旧位置をまったく動いていないものと思われる。また、これらの埋土層と石垣面との間には、間層が存在していないので、瓦屋根をもった建物が、石垣ともども乱暴に破却された状態が想定される。また、崩石の少ない東側で、石垣の基底部に近い面まで、厚さ５㎝ぐらいに焼炭を含んだ層が広がっており、東端近くの石は火にかかったと思われる石が二三個ある。このような状況から推して、この部分は、建物の屋根や外壁などを崩した後、火を掛けられた状態が想定され、伊丹落城後、すぐに信長が城郭の破却を行ったものと考えられる。

石垣の西面は入隅より６ｍ南で、石垣が途絶えてしまっている。この部分は裏側にかなり部厚い玉石の層があり、あるいは石垣がここで出隅を形成することも考えられる。しかし、この部分の玉石を除くと、西側の土塁および石垣が、かなり大幅に崩れ落ちる危険があるため、この部分で調査することを避け、南４ｍのところに幅３ｍのトレンチを入れて検討した。しかし、この部分では、石垣の南延長線より西へ１ｍ入ったところまで、土塁と思われる黄褐色土が続き、何の遺物も見当らなかった。この周辺では、残土の処分もあり、これ以上の調査はむつかしいため、前述の諸点の検討は、整備事業など、今後の機会にゆだねることにした。

３．北側土塁

西北隅から東へ曲った土塁の東延長線上は、金光教会の建物が建っていた場所の北端にあたり、周囲の敷地と同じ高さに削平されていた。その建設時に埋立られたと思われる煉瓦片を含む土を除去したところ、土塁の東延長面に、高さ６０㎝ぐらいで赤味がかった山砂質の土の段が連続していた。この段の東端近くに、現状では地表に露出した形で、数個の石が二段に積まれた形で残っている。この石は段の中腹に喰込むような形で残り、裏側には西の石垣と同じような拳大の裏込の石が詰まっているので、同じ石垣の連続した部分であると考えられる。なお、この石の延長線は西部の

石垣よりかなり北に向いており、北側の石垣は折線状の面を持っていたものと考えられる。また、東端石垣は、その高さからみて、根元に段を設けていたものと思われるが、それを裏付ける痕跡は見当らなかった。

4．村重時代の遺跡

西および北の土塁は、砂利まじりのかなり粗い褐色土層の上に残っているので、これに連続する面が荒木村重の有岡城の遺跡面に当るものと考えられた。本丸跡では、その上に、さらに砂利層が６０cmの厚さに堆積しており（阪鶴鉄道建設時の残土の可能性がある）、パワーシャベルで取去った後の残土を除去して、上面を調べたが、村重時代の遺跡と考えられるものは、北部で溝二条と井戸１ケ所、南部で礎石建物１棟分を検出しただけであった。

溝２条は、いずれも北側で東西に通っている。そのうち、北側のものは約６０cmの幅で、残存石垣の南端あたりから東に向って走っており、出土遺物からみて、村重時代のものと思われ、井戸と関連したものとも考えられる。他の一条は、その4.5m南にあって、調査地域の中頃から東へ向うものであるが、どのような性格のものかはっきりしない。

井戸は北土塁のすぐ南にある径1.3mぐらいの素掘のもので、上部には煉瓦など、新しい遺物を含んだ土が詰っていたが、やがて黄味がかった山砂質の土になって、遺物をほとんど含んでいない。深さ2.5ｍあたりで、周壁はほぼ垂直に下り、素掘の井戸である可能性が強い。井戸であった場合周囲の濠の存在から、地下水脈に達するのは約６～７ｍ下であることが予測され、かなりの危険を伴うため、今回の調査では、底まで掘下げることは断念した。なお、この井戸の側壁で検討したところ、村重時代の旧表から約１ｍ下った所に、幅１５～２０ cmぐらいの焼炭を含んだ層が北下りに通っており、そこから下は赤土の地山であり、上は砂利を含んだ一層の整地層で築かれていることが確認された。

礎石を使った建物は本丸の南端近くに１棟としてまとまったものが発見された。ここは金光教会敷地内で、別の住宅が建っていたところで、中央に径３ｍぐらいの大きな新しい土壙がある。その周辺に２０～３０cmぐらいの小さな礎石が東西６ｍ、南北6.9ｍの規模で柱筋に合せて配列されており、北側では２ｍ等間で３間分が、間に床束の石を伴って検出された。南側の礎石も一列に配されているが、柱割が北側とは合わず、また、欠けた礎石もあるようで、正確な柱位置や間取を決定することはできない。

この建物の西側には４ｍぐらいの位置に土塁が迫っているが、裾の部分を掘った限りでは石垣は検出されず、また、土塁本体の土にも達していなかったが、これ以上は堀と西側の住宅に影響が出るため完全に掘切っていない。

南側の駅前を西に抜ける街路に面したところは、ここに古い内堀があったかどうかの手掛を得る意味で、注意して調べたが、第２次大戦中に道路側から防空濠を掘ったために、完全に攪乱されていた。

5．伊丹城の遺跡

伊丹城の遺跡は、５０年度の調査で、村重時代の遺跡の下に、伊丹城の遺跡が存在していることが確認されている。そこで、本丸地区も村重時代の遺跡に重複しない部分で、下層まで掘下げて、伊丹城時代の遺跡を調査した。その結果、本丸地区は、ほぼ全面に４５㎝ぐらいの厚さで土盛がされていて、村重時代の遺跡はその上にあり、整地層の下には全体に１５㎝ぐらいの焼炭の層がありその中に、伊丹氏の居館時代の遺跡があることが判明した。この焼層は、３層か４層あり、火災が起った都度、薄く砂質土を入れて整地していることを確かめた。この整地層は客土層がきわめて薄く、礎石などを据えた所では、その工事の時の攪乱によってはっきりした層がつかめないほど頼りないものであった。下層遺跡のうち、礎石に使われたと思われる石が集中して出てきているのは、村重時代の礎石建物のあった北東の部分で、東西に連続して並ぶ石列（火災に遭った石が多い）の北側に、礎石に使われたと思われる石が多数散在している。そのうち、柱列として組み合うのは、トレンチ東端近くに一列に並ぶもので、柱間は2.6ｍ、２ｍ、２ｍになる。ただし、この礎石に組合うものは西側からは発見されないので、建物の本体は東側の道路のため削り取られた部分にあったのではないかと思われる。この礎石は伊丹時代の上から第２層にあり、下層にはもう一つ焼面がある。この礎石列の西側にも、建物の礎石として使用されたと思われる玉石が多数出土しているが、柱筋のはっきりするものはなく、恐らく相次ぐ再建の時に抜き取られた礎石も多くあるのではないかと思われる。また、南側の連続した石列の西延長上に、少し方向を違えて、４個の玉石が１列に並んでいる。この石も、ほかに組合うものがなく、あるいは東側の石と連続して、塀が通されていたのかも知れない。なお、この部分からは天目茶碗を含む陶器片が多く出土し、第２層からは焼米が出土した。そのほか、薄い敷瓦の破片が相当数出土している（火に遭っている）ことが、住宅の性格を考える上で、貴重な資料となるであろう。また、この地区も、伊丹城時代の遺跡の約６０㎝下層に、鎌倉時代の伊丹氏の居館時代の遺跡が存在することを、部分的に確認したが、上部の遺跡を壊さなければならないので、今回は調査していない。

２．西郭地区

１．西郭地区の地形

西郭地区は、駅前を西へ抜ける通りと荒村寺の間にはさまれた東西２９ｍ、南北１７ｍの細長い敷地で、住宅地として使用されていた。西側は高さ2.5ｍぐらいの石垣が積まれ、また本丸の土塁の南延長線より、かなり東まで低地が喰込んできている。敷地全体は平坦になり、ここもまた全体に６０～８０㎝の盛土が成されていた。

２．村重時代の遺跡

西郭における村重時代の遺跡で確認されたものは、調査地の中央から西寄の部分で、西側の土塁痕跡およびそのすぐ東を占める細長い池と矩手に折れ曲る石縁の溝１条である。

西郭の西部は、全体に挙大の石で６０㎝ぐらいに覆われていたが、西端近くは遺跡面が高くなり

現表土下５０cmぐらいで、赤味を帯びた山砂状の土が４ｍ幅をもって南北に続いていることが確認された。この部分は上からの攪乱が甚しく、また、石垣などの痕跡もとどめていなかったが、本丸地区に続く西側土塁跡と考えてよい。

西側土塁の東側は、幅４ｍぐらいにわたって深さ５０cmぐらいのゆるい曲面をもった溝が続いており、この中には拳大の石がぎっしりと詰っていた。この玉石層は遺物を包含していないので、いつの時期のものか判らないが、村重時代の整地層と認められる層との間には、砂礫を含んだ山砂状の土からなる間層が存在する。溝は東に行くほど深くなり（約１ｍ）、後述する溝の落口の石が東岸にあるところから、幅４ｍぐらいの池が帯状に長く南北に連なっていたものと考えられる。

池の東岸から東は、厚さ２０～４０cmの暗黄褐色の砂質土が全体を覆っており、この層が村重時代の整地層にあたる。この層の上部から建物などに関連した遺構は何も検出されなかったが、東岸から東へ５ｍ隔たったところに縁に石を並べた幅２０cmの溝が検出され、縁石に一石五輪塔や仏像を彫った石などを混入しているところから、村重の有岡城に関係したものと考えられる。この溝は南の方から、ゆるい波形を画いて７ｍぐらい続き、ほぼ直角に折曲って５ｍで池の東岸に達している。岸に接した所では、大きな石を両側に２・３個並べ落口を作っていた。また、曲角の東側には溝に沿って、大きな石を据えた時の根石と思われる石が散在しており、形のうえでもかなり意識した庭園が造られていた可能性がある。

３．伊丹城時代の遺跡

西郭もまた、村重時代の整地層の下には、伊丹城時代の遺跡がほぼ全面にわたって残存している。その主要部分は主に村重時代の溝から東にあり、焼炭を持った層の中に小形の礎石が柱筋を通して配置されている。これらの礎石のうち、建物としてまとまりのあるものは、中央部を占めるもので、桁行３間（8.1m）梁行３間（６ｍ）の建物で、東側に1.5mの庇状のものがつく。また南側では東端１間と庇部分を囲むような形で１間のかこいが付き、その中央には１ｍ角ぐらいの平たい石が据えられている。この平たい石の周辺には、礫が平坦に並んでおり、土間に沓脱石が置かれたものと考えられる。ついで、この建物の東北に、柱間が３ｍと2.2ｍで直角になるように石が３個配列されており、礎石建物の南西の角を示すものと思われるが、東側は駅前道路の削平により消滅してしまっている。

これらの建物のほかに、これに重複する形で、ほぼ柱筋を揃えて列になる礎石が数多く存在している。この礎石群の中央部には、大きな新しい土壙があり、そのために礎石のいくつかが抜かれている可能性があり、また、柱筋が同じものは床束石の可能性もあり、これ以上の建物を推定するのはむつかしかったが、礎石の形状や被災の状況から推して、少なくとも３時期以上の造営があったものと推定される。

この建物の西側に、0.8ｍほど隔たって南北に通る石縁の溝が検出された。この溝は、南の方では、村重時代の溝の下に入っており、建物の北端近くで東へ溝の幅だけ折れ曲り、さらに北へ続いている。この縁石は、焼炭を含んだ整地層の上に乗っているので、時期的には伊丹城時代の後の方

のものに属し、その位置からみて、前述の礎石建物と同時期に作られた可能性が高い。

礎石建物の北側で、この溝から東へ3.5ｍ隔たったところに、５個の石が南北に一列に並んでいる状態で検出された。この石は高さ上では西側の溝と釣合っており、この間が北へ続く通路である可能性もある。また、礎石建物の北柱筋の西から0.8ｍ入った所に南北に一対（２ｍ間隔）の礎石があり、北へ突出した玄関状のもの、あるいは北側にもう一棟の建物が並んでいたとも考えられるが、東隣が防空濠で切取られてしまっているので、その存在を断定することはできない。なお、中央の建物の南側では礎石はあまり見られず、東側は道路で切取られた部分まで、広がっていたものと考えられる。また、中央建物付近の焼炭層からは、土器磁器片にまざって、本丸同様、敷瓦の破片が数点出土している。

４．伊丹氏居館時代の遺跡

西郭における伊丹城の遺跡は、厚さ３０㎝ぐらいの整地層の中に含まれており、中央部(NOS3)の断面で検討した結果、その中に５層の整地層が認められた。この整地層の下は、さらに赤褐色土の整地層がある。この部分については、中央部に南北２ケ所設けられていた第２次大戦中の防空濠の底を利用して、遺跡の有無を検討した。そのうち、北側の防空濠の底からは、上層より古式な土器片や瓦器片が出土し、また拳大の玉石が並んでいる個所もあり、西郭の下層にも伊丹氏の居館時代の遺跡が広がっているのは確実である。

Ⅲ　遺構の考察

１．有岡城の遺構

伊丹城は鎌倉時代以降、摂津の豪族であった伊丹氏が代々居館を構えていた場所であり、応仁乱以後は、全国的に広がった戦乱に備え、屋敷の周囲に堀を設け防備を固めた城である。ついで、天正２（１５７４）年には織田信長のもとで摂津の大名になった荒木村重が居城として整備し、有岡城と呼び、天正７年１０月に信長に滅ぼされるまで存続した。

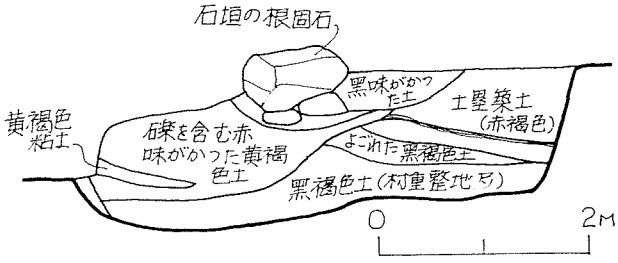
昭和５０年と５１年に行われた２回の発掘調査で、有岡城については、建物の跡はあまり発見されなかったが、大小３本の空堀や土塁、石垣などが検出され、その結果、有岡城は、平坦な土地の周囲に深い堀を設け、その内側に石垣で覆われた土塁を置いた平城であることがはっきりした。その内部にも、外壁に匹敵するような深い堀や小さな堀をいくつも設け、平坦な土地に濠を刻むことによって防備を固めている。

天正２年に伊丹氏を亡ぼしてその城に入った村重が最初に心がけたのは、中世以来、防備の固い城として知られた１７０ｍ四方の小さな伊丹城を整備することであったと思われる。城内は伊丹城時代の地表面に２０～４０㎝の盛土をほどこしているが、幾分黒くよごれた砕石まじりの土は、恐らく周囲の堀を拡張したときの排土であろう。周囲の土塁はこの整地層の上に築かれており、赤味

がかった褐色土と黄味がかった褐色土を盛っている。この土も伊丹の地盤に含まれているが、かなり締った良質な土なので、あるいは堀以外のところから運んだものかもしれない。

石垣は、このようにして盛られた土塁の表面を保護するために積まれているが、その積上げにはかなり細かく気を配っている。まず、土塁の外の石垣の底部に、仕上面より１ｍあまり持出して粘土質の土で基盤を作り、そこに大形の河原石を一列に並べて根固めにする。ついで、２個の根固石に１個の石がのるように品字形に石を積んでゆくのであるが、不整形な石が多いので飼石を多量に使っている。石垣の裏には、土塁本体との間に６０㎝ぐらいの厚さで挙大の石を詰めて裏込めにしている。今回調査した北面の石垣には宝篋院塔、五輪塔、五輪卒塔婆など、多数の石造美術品が積みこまれたり、崩れた石の中にまざっていた。このように寺院にある石造品を集めて、城の石垣として使用した例は、永禄１２（１５６９）年に織田信長が将軍義昭のために築いた二条城が有名である。伊丹城が築かれたのはそれから５年後の天正２年以降で、天正４年１２月にルイスが夜間に城を訪れた時には、すでに新しい城ができあがっていたから、天正４年の４月から石垣を築き始めた信長の安土城を参考にしている可能性は少ない。室町時代の摂津は細川氏の支配下にあり、村重も細川藤賢を通して何かと将軍家の近辺に接することが多かったものと思われる。伊丹城も二条城と同じように平坦な土地に築かれた城であり、村重がその形式や築城の方法などを二条城にならっていることは十分にあり得ることである。

挿図１　石垣底部の断面



有岡城の北西部の石垣は、73度の傾斜で内側で約５ｍの高さまで積まれていた。この石垣の上には、直下から出土した瓦に、隅の軒丸瓦と45度に切った軒平瓦が出土しているところから、入母屋造りの屋根を持った建物が建っていた。二条城においては、三つの門櫓が設けられ、そのうち南の門櫓には人があがって廻覧することができるようになっていた（言継卿記永禄12年閏５月３日・21日条）。二条城に隅櫓があったかどうかはわからないが、有岡城においては近世的な感覚の隅櫓が完成していたものと考えられる。

このように、隅櫓が建てられていれば、土塁の外側も当然石垣で覆われていた事になるが、内部の石垣の積方からみて、はたして濠底から１１ｍ余りの石垣を一息に積むだけの技術があったかどうか疑問の余地があり、今後の調査での検証が期待される（二条城の石垣は高さ四間一尺で、「磊（石垣）三重」と言継卿記に誌されている）。

城門については、これまでの調査では確認されていないが、荒村寺の西にかつては北西隅と同じような小高い山があり、祠が建っていたという伝承がある。二条城については「彼（信長）は釣橋がついたたいそう大きな美しい堀を造り、その中にさまざまな種類の鳥を数多く入れた。その釣橋のために彼は石堡と防壁とがついた三つの宏大な精巧な門を造り、内部に二つ目の、前のよりも幅

の狭い堀を造り、その後に設計設備ともに完く申し分なく、たいそう美麗広大な庭を造った」（ルイス・フロイス・日本史・柳谷武夫訳）といわれている。有岡城の西門の位置は51年に調査した西郭の少し南にあたるものと考えられるが、その近くから、かなり荒れてしまっているが、池とそれに流れこむ溝や、庭石の据付け跡が検出されたことは興味を引かれる。義昭の二条城に関しては京都の地下鉄建設の際に外濠の石垣の一部が確認されているが、全体の構成については、限られた文献による以外に知る方法がない。この点、伊丹城が、部分的にしか残っていないにしろ、考古学的な史料を提供できることは、非常に貴重なことである。

日本の城郭について云えば、その多くが戦闘機能を主眼に置いた城塞的なものである。一方、戦国時代以降、豪族が自分の居館に防御施設をほどこした家城と呼ばれる城が数多く存在したが、その多くは実態を明確にされないまま失われてしまっている。この点、伊丹城が、京都に近い摂津の中心的な城郭として、数少ない家城系の構えを部分的にしろとどめていることは非常に貴重なことである。

2．伊丹城の遺構

伊丹城の遺構については、周辺の構えは、荒木村重により大々的に改められているため、はっきりしないが、少くとも北側の崖に接した部分は、旧表が北に向って緩く傾斜し、土塁なども設けられていなかったことがわかる。居館については、西側に近いところまで、かなりの棟数の建物が建てられ、それも何回も火災を受けては建直されていた。建物については、平面の間取まで推定できるものはなかったが、使われている礎石は非常に小さく、柱間も２ｍ前後で、京都の霊雲院書院にみられるような木割の細い建物であったことが推定される。また、厚さ２㎝ぐらいで27㎝角ぐらいの四角い敷瓦の破片が各所から出ており、茶室や禅宗寺院の方丈の玄関にみられるような、敷瓦を四半敷にした土間床が使われていたものと考えられ、天目茶碗や三彩の置物などの出土品から判るように、当時京都で流行していた茶湯的空間の嗜好が、地方の豪族の居館にも及んでいたことが推測される。

Ⅳ　遺　　物

推定本丸跡および西郭北部からは、有岡城時代および下層の伊丹城時代の遺物を検出した。第１次調査と同様、中世を特徴づける土師質土器・瓦質土器・中国よりの渡来品をふくむ陶磁器の類は、ほとんどが細かい破片ながらも、各層から多数出土している。建築に伴う遺物としては、本丸跡西北隅の石垣裾に散布していた多量の瓦片と、伊丹城整地層内と西郭北部で検出した敷瓦片がある。出土品中もっとも特色あるのは、伊丹城整地層内から一括して出土した染付・天目・青磁・白磁などの陶磁器片と明三彩の置物・硯・水滴など当時の武家生活の一端を示すものであろう。出土品全体については整理中であるため、詳細は次の機会にゆずり、おもな遺物のみ簡単に紹介したい。

本丸跡西北隅の、有岡城時代の櫓に用いられた瓦のうち、**軒丸瓦**は尾の長い三巴文の周囲に20個の連珠文をめぐらし、高い外縁をつける巴文軒丸瓦で、玉縁がつく。これに対応する**軒平瓦**は三弁の中心飾から左右に三転する均斉唐草文に高い外縁をつける段顎の唐草文軒平瓦である（図版25の1・2）。また**隅軒丸瓦**は瓦当と丸瓦をほぼ60度に近い角度でとりつけ、端は行基葺である。**隅軒平瓦**は平瓦の半分を瓦当の一端から斜めにほぼ45度に近い角度で切り落す（図面11の1・2）。**敷瓦**は、西郭で完形に近いものを得た。28.3cm×26.0cmの正方形に近いもので、厚さは2.1cmである。焼成は軟質で、胎土は砂粒を多くふくむ。黝黒色を呈するが、一様でなく茶褐色ないし灰色もみられる。通常の建物にはほとんど用いられぬので、今後の検討を要する。

染付の茶碗は、多数の破片を得ている。復原した1点は径12.1cm・高さ 6.2cmで、高台をつける。高台の径 4.9cm・高さ 0.9cm。外面の口縁下と腰および高台の上部にそれぞれ線をめぐらし、胴には円の中に柿であろうか果物らしい丸い物に多数の木の葉と枝をあしらった文様を四つ配し、間に上下に向いあう三叉状の文様を入れる。高台内には、「福」の一字を四角で囲んで記す。内面は、口縁下に幅1.5cmほどの斜格子文帯をめぐらし、底に二重円で囲み外面の文様を略したものを入れている（図面11の3・図版25の5）。口径16cm・高さ4.5cmの小鉢や「宣徳年製」銘の小杯もある。**天目茶碗**も破片は多いが復原できるものは少ない。推定径13.0cm、高さ 7.5cmのものが1点ある。口端部が軽く外反し、口縁下のくびれは明瞭である。肩は丸みをもつが、腰部は直線的にヘラけずりしている。削り出し高台で、高台脇には段があり、高台内は截頭円錐状に浅く削りとる。高台の径 4.4cm、高さ 0.8cm、胎土は細かく、わずかに雲母の微粒をふくみ茶褐色である。釉は荒れているが光沢ある褐色で、内面は全部、外面は上半にのみかかり、その下端に厚くたまっている（図面11の6図版25の7）。**青磁**はいずれも破片のみで復原径12.5cmほどの碗がある。外側に縦の沈線を施す（図面11の9）。他に小片だが外側に剣先の沈線で蓮弁を施すものもある。**白磁**はいずれも皿の破片とみられる。径11～12.5cm、高さ 3.0cmほどで、口縁部が外反し高さ 0.4cmほどの高台をつける。火にあって淡い黄褐色をおびるものもある(図面11の10～12)。水鳥を形どる**明三彩**の置物が出土している。現存高は 7.5cmほどで、頭部から肩にかけての半面の破片で、頭部に浅く目が刻まれている。胴部には刻文があり淡黄色の釉を施している。型にあてて作られたらしく、内側には指頭でおさえたあとがある。胎土は精緻で、淡黄褐色を呈する。首から肩にかけて2段のくびれがある（図版25の3）。肩の張った土瓶型らしい**水滴**が出土している。把手、注口を欠き、胴部の径 4.2cm、高さ 2.7cmで口径は 1.7cm、底部に糸切痕をとどめる。底をのぞいて、茶褐色釉がかかる(図面11の13・図版25の4)。**硯**は2点出土した。1点は池の大半を欠き、全長は不明だが現存長12.5cm、幅 6.9cm、高さ 1.6cm、灰白色の粘板岩製で、この時代に通有の角張った長方形のものである。周囲に幅 0.3cmほどの縁をつける。使用による磨耗が著しい。裏面は長辺にのみ幅 0.8cm、高さ 0.4cmほどの縁を削り出している。池の裏側にかけて削りを漸減し、表の池の下りに対応させている(図面11の14・図版25の9)。もう1点は、長さ 7.0cm、幅 0.3cm、高さ0.8～1.1cmで暗赤褐色の粘板岩製、小型品である。ほぼ長方形で、一端は角張っているが、他端は圭頭状になっている。これは、より大きな硯の割れた破片を裏返して荒く彫り直し、再使用したもので、裏面に元の池の隅や割れ痕をのこしている。墨痕をのこし、実用に供されたことがわかる(図面11の15・図版25の8)。以上は伊丹城の整地層内から出土したもので、焼炭層から出たものが多い。度々の火災のあと、整理され埋められたようである。なおこのほかに**銅銭**が4点出土した。「熙寧元宝」「元祐通宝」「天禧通宝」の南宋銭3点、「□□通宝」とのみ判読できる1点である。上の陶磁器とともに当時の流通経済の一資料でもある。

日常生活に用いられた大型の陶器としては、備前焼の大甕、大壺、すり鉢（たとえば径31cmなど）の破片も多数みられる。他に灯明皿に用いられたらしい土師質土器片も多数出土している。

V 石造美術

1. はじめに

今回の調査で出土した石造遺品を石造美術として紹介するにあたり、はじめに石造美術の定義・

分類・時代区分についてふれておきたい。[1]

石造美術とは「石を素材として造ったもののうち、考古学が対象とするものを除き、すべて石造美術という」と定義している。したがって築城史を研究するために最も重要な石垣については、考古学が対象にするので、石造美術の範疇には属さない。

近年のいちじるしい研究の進展に伴ない、また構造や用途によって、いま石造美術は29項目に分類されているが、そのうち伊丹では10種類が知られている。今回出土した石造美術は７種類で、ほぼ網羅されているといえる。

本稿での時代区分は、中世を文治改元（1185）から元和改元（1615）までの430年間とする。そのうち鎌倉時代は文治改元から建武改元（1334）までの150年間、南北朝時代は建武改元から応永改元（1394）までの61年間、次の室町時代は応永改元から慶長末年（1615）までの222年間とする。各時代を３等分して前・中・後の３期に分け、さらに比較的期間の短い南北朝時代を除いて各期を等分し、それぞれ前半・後半と呼んで記述を進めたい。

出土した石造美術は、繁雑のきらいはあるが、できる限り詳細に在銘品[2]との比較検討をし、造立年代の推定を試み、編年をしてみよう。

２．各　　説

１．宝篋印塔

基礎・塔身・笠・相輪の４部から成り、とくに笠を段形に造り、軒の四隅に隅飾りとよぶ突起を立てることに特色のある塔形を宝篋印塔という。さらに基礎上端も段形と、反花式の２形式が初現以来相ついで行われるようになり、県下では在銘最古の加古川市土山の共同墓地の元亨３年(1323)塔をはじめ、反花式が普遍的である。伊丹では最古の大鹿妙宣寺の宝瓶三茎蓮を飾る無銘（1320年頃）残欠（基礎）、同所建武４年（1337）残欠（基礎）はともに上端を２段式に造るが、次の墨染寺観応２年（1351）残欠（基礎）から以後のものはすべて反花式となる。

宝篋印塔残欠（基礎）１　残っているのは基礎だけで、花崗岩製、高さ26cm、上に中央複弁一葉の左右に間弁を配し、隅は単弁の反花を刻出し、その上端の方形座は厚さ２cmで目立って厚く、一辺は21.7cmである。側面の高さは16.8cm、幅は上下端とも34.2cmで、各面輪郭を巻き、格狭間を入れ、内部はすべて素面である。輪郭の彫り込みは浅く、格狭間は心もちふくらみ、その面は輪郭よりわずかに張りだしている。側面の高さに対する幅の比率の2.03は鎌倉中期式であるが、この比率に前後するものが、川西市国崎の応安５年（1372）塔、尼崎市西運寺残欠（基礎）（1380年頃）と川西市慶積寺の寄せ集め塔（1500年頃）に見られるが、反花や格狭間の手法からは古式とは見られず、側面の背が極めて低いことも、むしろ退化形式と見るべきであろう。この塔が揃っているときの高さは120cmの四尺塔で、小形化の傾向がつよく、おそらく室町前期後半の中頃の1450年代のものであろう。

宝篋印塔残欠（基礎）2　残っているのは基礎だけで、花崗岩製、高さ27.1cm、上に中央複弁一葉の左右に間弁を配し、隅も複弁の反花を刻出し、その上の方形座は厚さ1.2cm、一辺21.8cmで、側面の高さは20.5cm、幅は上下端とも35.5cmである。いま3面は石垣のなかにあって不明であるが、露出した1面は輪郭を巻き格狭間を入れ内部は素面である。輪郭の彫り込みは深く、格狭間は普通のものであるが、その面は強く張り輪郭の面よりわずかに出ている。側面の比率は0.73で、本泉寺宝徳2年（1450）残欠（基礎）より背は低いが、反花の手法、格狭間の側線も似るなど、おそらく同年代のものであろう。

市域の宝篋印塔はすべて残欠ばかりで、鎌倉時代後期後半から室町末期までの遺品は、在銘6基のほかに無銘27基が知見にある。

2．五　輪　塔

基礎・塔身・笠・請花・宝珠の5部より成り、方・円・三角・半円・団形の塔形を五輪塔という。密教の五大思想にもとづく五輪図形が祖形であるから、上から空・風・火・水・地輪と呼ぶのが正しいのであるが、他の塔形の各部と名称を共通させる便宜上、このように名付けるのである。5部別石で造ったものが本格であるが、空・風輪は一石で造るのが普遍的である。伊丹には古い遺品が少なく、すべて残欠ばかりで、その最古は春日丘の伝和泉式部墓塔（塔身と一石彫成の請花・宝珠）で1330年頃の造立と推定されるものが鎌倉時代で、ほかはすべて南北朝時代以後のものである。

今回の調査で基礎ばかり4基が発掘されたが、石垣中の1基3の1面（他の3面は不明）に、梵字アの四転であるアン字が小さく陰刻されている。4と6の下端は不整形の埋め込み式であり、5は下部が地中にあって構造が不明である。4基とも上端の面を傾斜に造り、その一辺が32cmから40cmまでの徹底した小形塔に属する。一般に本格的な別石造りの五輪塔が、庶民の間に普遍化した一石五輪塔に移り変るのは、室町中期後半も中頃の1530年代と思われるが、本遺品もこの頃のものとして大過ないであろう。

3．五輪卒塔婆

一石彫成の五輪塔で、基礎が方柱状に長く造られたものを五輪卒塔婆という。背の高い基礎を身部と根部に分け、下端の根部は荒叩きで、この部分を地中に埋めて建てる。五輪卒塔婆の基礎は五輪塔と異なり、身部に相当し、本尊としての像容や種子のほかに偈文・真言および銘文を配する塔の主体部である。市域での最古は本泉寺の地蔵立像を陽刻する基礎で、鎌倉後期後半の1310年頃のものであろう。同所には永正2年（1502）在銘で、上部に地蔵坐像を刻出し、その下に銘文を配する1基が知られている。

五輪卒塔婆残欠（基礎）7　石垣に積み込まれ、正背面がわずかに観察できるばかりである。花崗岩製。塔身以上を欠失し、基礎の現高約49.5cm、幅上端23.2cm。上端に塔身下端部のあとが残っており、その径は21.5から22cmである。正・背面上端に梵字ア・アンが刻まれているが、不明の他の面にもおそらく五輪塔四門の梵字が刻まれていたものと思われる。正面ア字の下に舟形光背を彫りくぼめ、蓮華座上の地蔵立像を刻出している。仏高23.5cm、面長6.5cm、面幅5.4cm、肩張り9.7

cm、裾張り10.5cm、厚さ1.1cm、光背高さ24cm、深さ肩で1.5cmである。蓮華座高さ4.5cm、幅4cmで弁数は五形と思われるが確かでない（仏高以下の数値はすべて概略の寸法である）。持物は左手宝珠、右手に幡を持ち左肩で支えている。いわゆる捧珠・持錫の地蔵は単独で造られる例が多いが、この像のように幡を持つ尊像は六地蔵には見るが、独尊として造られることは珍しい。地蔵尊は迷の世界六道を廻って、衆生を苦から救うことを担当する菩薩ということから、六道（地獄道、餓鬼道・畜生道・修羅道・人間界・天上界）能化のために、それぞれに持物を替え、変化身をなす地蔵が造られるようになった。本塔のように梵字の下に像容を刻出する例に尼崎市三反田塔（1409年頃）があるが、それと比較すると、身部が低く、小形であるなどを考えると、室町中期後半の1520年代のものであろう。

五輪卒塔婆残欠（基礎）８　残っているのは基礎だけで、花崗岩製。現高63.8cm、身部高さ43.7cm、幅は上下端とも19.2cmで、以下を根部とし、その高さ20.1cmである。身部上方に舟形光背を彫りくぼめ、仏高15.5cmの弥陀坐像をうすく刻出しているが、膝以下は省略されて彫られていない。このように規模も小さくなり、簡略化が最も進んだ形式のものは、室町後期前半の1550年代のものであろう。

本例と前後する寸法、形式のものが他に２基９、１０があるが、いずれも同時期のものであろう。

４．一石五輪塔

一石彫成の五輪塔のうち、とくに室町時代のものに限り、一石五輪塔という。さらにその構造形式によって次の３種に分類する。[(3)]

(1)　本格式……基礎の背の低いもの。

(2)　細長式……基礎の背が細長いもの。

(3)　埋込式……基礎の下端を地中に埋めて建てるもの。

一般に室町時代に入ると、庶民の間に造塔が盛に行われるようになり、それに伴なって小形化とともに簡略化する傾向がいちじるしいが、なかでも五輪塔に顕著で、小形の一石彫成塔がおびただしく造られるようになった。現在一石五輪塔最古の在銘遺品は、大阪府貝塚市半田墓地の応永６年（1339）塔で砂岩製である。県下では伊丹市経王寺の応永28年（1421）塔が最古で花崗岩製であるが、ともに本格式である。さらに市域にはこれに続く花崗岩製の在銘遺品が６基あり、これは周辺地域にない特色であろう。

出土遺品は11基で、うち１基が文安５年在銘で砂岩製のほかは、すべて花崗岩製であり、かつ無銘であるほか、五輪塔に普遍的な四門の梵字もない。

一石五輪塔残欠（基礎）１１　残っているのは基礎だけで、塔身の下端がわずかに残り、現高13.1cmで、塔身の径は11.2cmである。基礎の高さ12.5cm、幅は上端15.6cm、下端15.7cmで、四面の上方に梵字アの四転であるア・アー・アン・アクを配し、正面に３行、計12字の銘文を陰刻している。

石材の砂岩は大阪府の泉南の産であり、同石材の最古は、西宮市満池谷墓地の永正15年（1518）塔であったので、その石材の移入の年次が70年余も遡り、和泉砂岩製の一石五輪塔の遺品として県下最古の在銘であり、残欠ではあるが貴重な資料である。

一石五輪塔１２　花崗岩製、空・風輪欠失、現高14cm、基礎側面の高さ15.3cmで、幅は上端19cm、下端18.8cmの本格式である。笠上端は水平になり、塔身も完好なつぼ形を呈し、全体に造りも丁重で、基礎の高さに対する幅の比率の大きさと相俟って、室町前期後半の中頃の1450年代のものであろう。

一石五輪塔１３　花崗岩製、完全、総高50.3cmで、基礎側面の高さ14.7cm、幅は上下端とも18.1cmの本格式で、宝珠の先端まで完存する唯一の遺品である。塔身も完好なつぼ形を呈し、基礎と塔身の比率も１２にほぼ同じで、同年代であろう。

一石五輪塔１４　花崗岩製、空・風輪欠失、現高47.5cm、基礎側面は高さ19cm、幅上端20.2cm、下端20.4cmの本格式であるが、基礎上端を斜めに切り、その高さ０.８cmで塔身を受けている。笠の軒隅の増が強く、笠上端が丸味をおびるなど、時代が下ることを示すものであろうが、全体としては形態もよく、造りも丁重であることから、室町中期後半の初頭1500年頃のものであろう。

一石五輪塔１５　花崗岩製、空・風輪欠失、現高46cm、基礎側面は高さ20cm、幅上端18.8cm、下端19.2cmで細長式に属する。基礎上端を１cm斜めに切り、塔身の側線に力がなく、笠も軒が厚く、隅で急に厚みを増し、下端に向って斜めに切り、全体に粗い造りになる。これらを総合すると室町中期後半の終り頃の1530年代のものであろう。

一石五輪塔１６　花崗岩製、空・風輪欠失、基礎側面は高さ18.3cm、幅上端16cm、下端15.3cmの細長式で、下端が丸くなっているが、あるいは埋め込んでいたのかも知れない。基礎の側面は幅18.2cmもあり、長方形になっている。笠の軒は厚く、下端が直線的になり、隅の増しは強く、軒の側面も丸味が加わり、全体が粗く簡略化がめだつが、室町後期初頭の1550年代のものであろう。

一石五輪塔残欠（基礎）１７　西郭の溝の側石に使われている。残っているのは基礎だけで、花崗岩製、現高39cm、幅13cmで、上部30cmを細かく叩いて仕上げ、以下を荒叩きの根部とする埋込式である。正面の上端に舟形光背を彫りくぼめ、うちの蓮華座上に定印の弥陀坐像を刻出している。五輪塔は塔形そのものが信仰の対象であり、他の塔形では塔身が主体部で、造立者が信仰する本尊を配しているのとはいちじるしく違っている。しかしまれに水輪を塔の主体部とみなし、これに四方仏を像容や種子で配し、または塔身の正面だけにその信仰する本尊を刻出するものもあるが、本塔は後者の例に属する。室町後期初頭の1550年代のものであろう。

一石五輪塔１８　西郭の溝の側石に使われている。花崗岩製、空・風輪欠失、現高47.7cm、基

礎の高さ35.5cmで、上部25cmを細かく叩いて身部とし、幅は上端14cmで、以下を根部としている。笠・塔身とも押しつぶしたような形になり、出土品中もっとも簡略化した塔形を示す。年代もそれだけ下り、おそらく室町後期前半の中頃1560年頃のものであろう。

その他残欠１９・２０・２１が西郭と、本丸の石垣中に見られる。

花崗岩製の遺品は、五輪塔に一般的な四門の梵字もなく、銘文も痕跡をとどめていない。これは初めからないのではなく、供養塔として造立されたときは墨書されていたものであろう。石材は六甲山の御影石で、丁重な造りほど古く、粗製なものほど新しい傾向が見られる。

5．板　　碑

1個の板状の石より成り、先端を山形に切り、肩以下に2段の切り込みをつけ、その下に額部を残し、以下の広い面を身部とし、下端を不整形かつ荒叩きの根部とし、この部分を地中に埋めて建てる塔形を板碑という。身部の上方に尊像や種子または名号や題目などで本尊を配し、その下に偈文や真言および銘文を刻む。板碑は武蔵地方で発生以来、急速に全国各地へ伝播し、中世を通じて盛に造立され、宝篋印塔や五輪塔とともに最も普遍的な塔形となったが、その地方で産する石材により、年代差とともに地方差がいちじるしく、板碑の構造形式はきわめて複雑である。市域での最古は北河原来迎寺の弥陀一尊板碑で、無銘ではあるが鎌倉後期前半の1300年頃のものである。在銘では雲正の上応永27年（1420）地蔵板碑が最古である。

弥陀一尊板碑２２　現在西郭の溝石に転用されている。花崗岩製、完全。総高50.5cmで、上部を山形に切り、その高さ6.7cm、肩の幅18.5cm、その下の高さ3cmを0.5cm突出させ額部とし、額部以下は全面を1cm削平し、以下の高さ24.6cmを身部とし、その上方に高さ15cm、幅13.7cm、深さ1.3cmのコ字状の輪郭を彫り込んでいる。下端の根部は不整形の荒叩きで、背面は舟底形に造るが、厚さは半ばが土中に埋れていて不明である。輪郭内一ぱいに、蓮華座上に定印の弥陀坐像を刻出している。尊像を大きく彫出するのは古式であるが、肉付きがうすく、全体が小形化し、額部の切り込みも簡略化するなど新しい様式が目立ち、これらを考えると、室町前期後半も終り頃の1460年代のものであろう。

板　　碑２３　第1次調査で出土したもので、現在伊丹市立博物館に保管されている。花崗岩製、完全で、総高52.4cm、先端を山形に切り、その高さ2.4cm、肩の幅19.6cm、肩と先端の間を内にくり、肩以下の高さ6cmを0.6cm突出させて額部とし、その幅は23.8cmで、上半に一段の切り込みを付けている。額部以下を全面にわたり0.3cm削平し、その上方に高さ25cm、幅上端16cm、下端16.8cm、深さ0.6cmのコ字状の輪郭を彫り込み身部とし、以下の根部は荒叩きである。両側面はやや不整形で、背面は舟底形になり、厚さは最大12.4cmである。身部の輪郭内下端に蓮華座を刻出しているほかは、なんらの痕跡もないが、おそらく造立当初は墨書されていたものと思われる。この形式の板碑は室町初期からのものが、尼崎市から当市にかけて比較的多く残っており、他の諸例から比較すると、室町中期後半の中頃1520年代のものであろう。

双頭板碑２４　花崗岩製、下部を欠失し、現高32cm、先端に山形を2つ並べて切り、その高さ

6.3cm、谷の深さ4.2cmで、先端は背面に1.5cmそり返っている。肩の幅は30.5cmで、その下の高さ3.4cmは山形の下端より2.5cm突出して額部とし、その中央に一線を刻んでいる。額部の下の高さ22.3cmが身部で、その幅は上下端とも33.5cmで、左右に幅3cmの輪郭を残して深さ1.3cm彫り込み、中央に薄い輪郭を刻出して内部を2区に分けるが、その内部は左右の輪郭の面より0.9cm張り出している。背面は舟底形に造り、厚さは額部が最大で13.4cmである。2区に分けた輪郭内には何も彫られた痕跡はないが、造立当初は墨書されていたのであろう。このような双頭板碑で、室町後期初頭の天文13年（1544）在銘のものが尼崎市七松町の共同墓地にあり、構造形式が似ているので、ほぼ同年代と考えられる。

弥陀一尊板碑２５　花崗岩製、下部を欠失し、現高29cm、全体が平面で、先端を山形に切り、その高さ13.5cm、肩の幅22cmで、肩以下の高さ15.5cmを身部とし、その下端の幅は22.7cmで、背面は切放しのままであるが、滑らかである。厚さは先端が最大で10.8cmである。身部の上方に直接定印の弥陀坐像を刻出し、その面は身部の表面より1.3cm張り出しているが、膝以下は省略され刻出していない。石塔の像容は舟形輪郭内に刻出するのが本格であり、普遍的であるが、この板碑のように直接彫り出すのは異例で、遺品も少ないが、尼崎市東富松西運寺の永禄11年（1568）弥陀石仏が同式であり、他にも若干遺例があることから、この頃多少流行した手法と考えられ、この塔の造立年代もそれに近いものであろう。

そのほかに、２６などの残欠があるが、２５と同じ頃のものであろう。

６．石　　仏

地蔵石仏２７　現在は伊丹市伊丹字古城町５５７の国鉄大阪工事局伊丹工事区事務所の前に移され、最近仮堂も建てられて丁重にまつられている。今年の１月２４日に、現在地より約20m北寄りで、福知山線の複線電化に伴う掘削工事中に出土した。花崗岩製、完全、舟形光背下端の蓮華座上に地蔵立像を肉厚に刻出し、円光背を負う。光背下端を約15cmコンクリートに埋め込まれているので、現高116.8cm、幅は地上で65.5cm、それより50cm上が最大70.3cm、厚さは地上で20.2cmである。正面は全体に6cm弯曲し、肩のあたりが最深6cmで、先端の5cmは石の面より約3cm突出している。正面と左右側面は細かく叩き、背面は切放しである。地上に接し高さ10cm、幅は35.2cmの七弁より成る蓮華座を肉厚に刻出し、その面は8.5cm張り出している。像容は高さ83.9cm、面長16.4cm、面幅12.9cm、肩張り25.5cm、裾張り28.2cmで、その面は7.5cm張り出している。宝珠を捧げる左手の指は克明に刻出され、錫杖の輪形を飾る五輪塔形の高さは7cmで、その形式は古式である。

このような左手に宝珠を捧げ、右手に錫杖を持ついわゆる六道能化の石地蔵が造られるようになるのは、鎌倉中期も中頃からで、以来この形態が普遍化し、庶民の信仰を阿弥陀如来と二分し、最も親しみ深い菩薩となった。県下最古の地蔵石仏に、姫路市福林寺の元亨3年（1323）半跏像がある。隣接する尼崎市如来院の嘉暦2年（1327）笠塔婆は上部輪郭内の蓮華座上に地蔵立像を肉厚に刻出し、小花入り素弁八葉の蓮華文を薄肉彫りした円光背を負い、捧珠持錫の尊像であるが、実に優れた彫法を示している。城跡に近い雲正の上（旧旭町所在）に応永27年（1420）地蔵板碑があ

って、下方に弥陀三尊と思われる尊像を刻出した珍しいものである。

あらためて本石仏を検討すると、鎌倉時代の規模の大きなものから小形化に進む傾向が見られるが、なお本地域では比較的大形であること、舟形光背が幅広になり、全体にわたって弯曲し、先端をやや突出させるなど、前時代の遺品に比べるといちじるしい変化が見られる。蓮華座は如来院のような幅広な鉢形ではなく、下端が絞られたような浅鉢式である。像容は比較的肉厚に刻出されているが、手・足首は細めで、これが全体として繊細な感じを与えている。尊顔は温和で、身にまとう地蔵独特の袈裟の表現は実に写実的である。錫杖頭はやや小さめであるが、輪形内部を飾る五輪塔形は完好な形を保っているなど、総合的にみると極めて丁重な造りといえよう。このように見てくると、如来院像にはおよばないが、雲正の上板碑像とは格段の差があり、さらに周辺地域のものと比較して見ても南北朝時代を下るとは思えず、その中頃の貞治・応安（1360年代）頃のものと推定して大過ないと思われる。

7．その他の石材

本丸の石垣に組込まれている２８には枘が見られるので、笠塔婆などの塔形が考えられるが、他の２９・３０・３１は長方形の石材で、延石造りの基壇かと推定されるものである。

3．ま　と　め

石垣の石材として多くの石塔類が転用されていたが、それらを一括して石造美術として７項目に分類し詳説した。その内訳は別表に掲げるように31基で、うち在銘は１基にすぎない。従前、市内にあって石造美術として『伊丹市史』第６巻、および補遺として『地域研究いたみ』第５号[(4)]・第７号に採録された遺品は、在銘・無銘を合せ66基に達するが、それをみると中世を通じて普遍的な塔形である宝篋印塔・五輪塔・一石五輪塔・板碑が全体の73％を占めているが、出土品もまた同じように71％で、これは築城当時においても分布の状態が、ほとんどかわりがないことを示している。

調査による出土ではなかったが、南北朝時代の地蔵石仏の出土は、そのすぐれた彫法によって、鎌倉時代後期に数多く造られた層塔に伴う四方仏、たとえば、大鹿妙宣寺西塔や北河原来迎寺の塔身２基、および同所弥陀石仏（田岡香逸によって神戸市御影町石屋の石工の作と推定されている）などと同じ系統の石工の作品と考えられ、市域での鎌倉・南北朝時代に亘る層塔、宝篋印塔の造立が全体の30％を占めていることによって示めされる、豊かな経済的基盤が受けつがれていたことが知られよう。

市域には鎌倉時代中期から後期にかけての石造層塔が寄せ集めや残欠を含め11基あり、これは周辺地域に見られない特色でもあるが、比較的転用しやすく、九重・十三重塔など一か所での徴発が容易と思われる層塔が１基も出土していないのはどうしたことであろうか。造立されて300年近く過ぎているために、倒壊あるいは埋没して、当時すでに不明であったのかも知れない。

城の石垣の石材に、石造美術が多く転用されている例として、大和郡山城が早くから知られてい

伊丹市の石造美術				伊丹城跡発掘品	
番号	名称	数	百分率	数	百分率
1	層塔	11	16.7	—	—
2	宝塔	1	1.5	—	—
③	宝篋印塔	13	19.8	2	6.5
④	五輪塔	1	1.5	4	12.9
⑤	五輪卒塔婆	2	3.0	4	12.9
⑥	一石五輪塔	20	30.3	11	35.5
⑦	笠塔婆	14	21.2	5	16.1
8	板碑	2	3.0	—	—
9	無縫塔	1	1.5	—	—
⑩	石仏	—	—	1	3.2
11	井戸枠	1	1.5	—	—
⑫	その他	—	—	4	12.9
合計		66	100.0	31	100.0

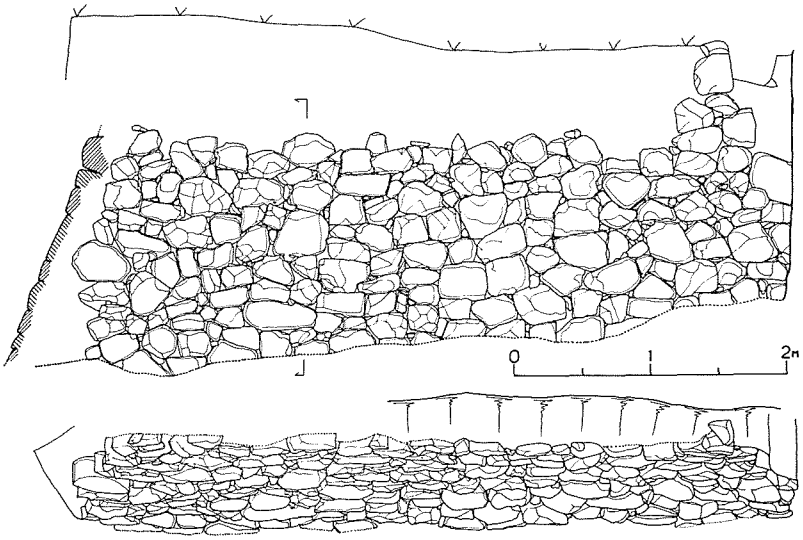
（注）　番号の○印は発掘品の名称を示す。

たが、近年の調査によって、塔の心礎をはじめ、すぐれた石造美術のなかに、奈良時代の頭塔の石仏まで発見された。このように仏教関係の遺品を多く使用した城は全国的にもまれで、大和郡山城の大きな特色といえよう。伊丹城も、石造美術の質の点では比ぶべくもないが、発掘面積に対する出土量という点からはそれに比肩するものであろう。

伊丹城の築城について、その範をもとめたといわれる京都二条城の築城に伴い、信長により石塔や石仏などいろいろな石造遺品の石狩りが行われたという伝承は、最近の地下鉄工事の事前調査で、石塔や石仏などが発掘されたことによって裏付けられた。このように信長の二条城や村重の伊丹城とくに羽柴秀長による大和郡山城の拡張工事にあたり、大和一円にわたる大規模な石塔類の徴発が行われたというのは、そのいずれもが信仰の対象であるから、世論の批判を免れなかったであろうが、それをあえてしたのは、築城を急ぐために、石材の不足を手近な石塔類に依存せざるをえなかったためであろう。

ともあれ発掘の石造美術はほとんど残欠ばかりで、かつ、銘文もとぼしいが、そのいずれもが中世の伊丹を考えるうえに貴重な資料であるから、大切に保存されなければならないこと、論を俟たないであろう。

(1) 田岡香逸「石造美術学概論」（『石造美術』第１号・第２号、昭和５２年１月・５月）
(2) 同　「中世伊丹の石造美術」（『伊丹市史』第６巻、昭和４５年）
(3) 同　「伊丹荒村寺応安七年宝篋印塔基礎と伊丹城跡発見文安五年一石五輪塔基礎」（『地域研究いたみ』第７号、昭和５２年３月）
(4) 同　「伊丹の中世石造美術」（『地域研究いたみ』第５号、昭和５１年３月）



挿図２　　内堀南壁の石垣実測図

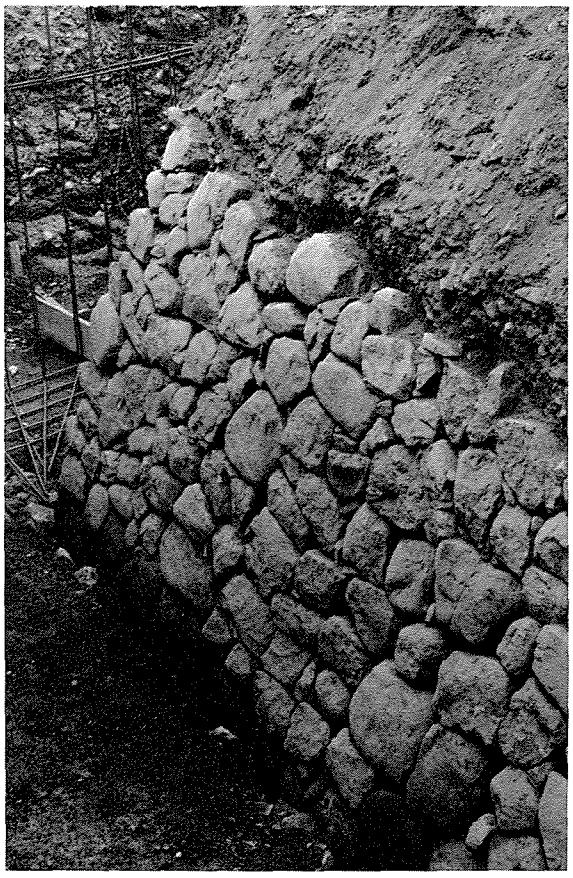
補：内堀南岸の石垣

第２次調査の現場作業が終了して程ない８月２１日に、第１次調査時に検出した内堀南壁の西延長線上で、現在の道路面の下から古い石垣が発見された。その位置は、第１次調査で検出された内堀南壁西端から西へ９ｍ隔たった所で、国鉄伊丹駅前整備事業に関連して土地を削り取るため、道路予定線に擁壁を建設するための作業中に発見されたものである。

石垣は現存の民家の敷地境界の直下にあり、東西約５ｍ分、高さ約２ｍほどが露出しているが、なお西と下方に連続している。石垣の傾斜角は７３度で、第１次調査の際北壁で得られた傾斜角と一致している。野面石の乱層積で、北側石垣のように石造美術品の混入もなければ、裏込石もほとんど使用されていない。

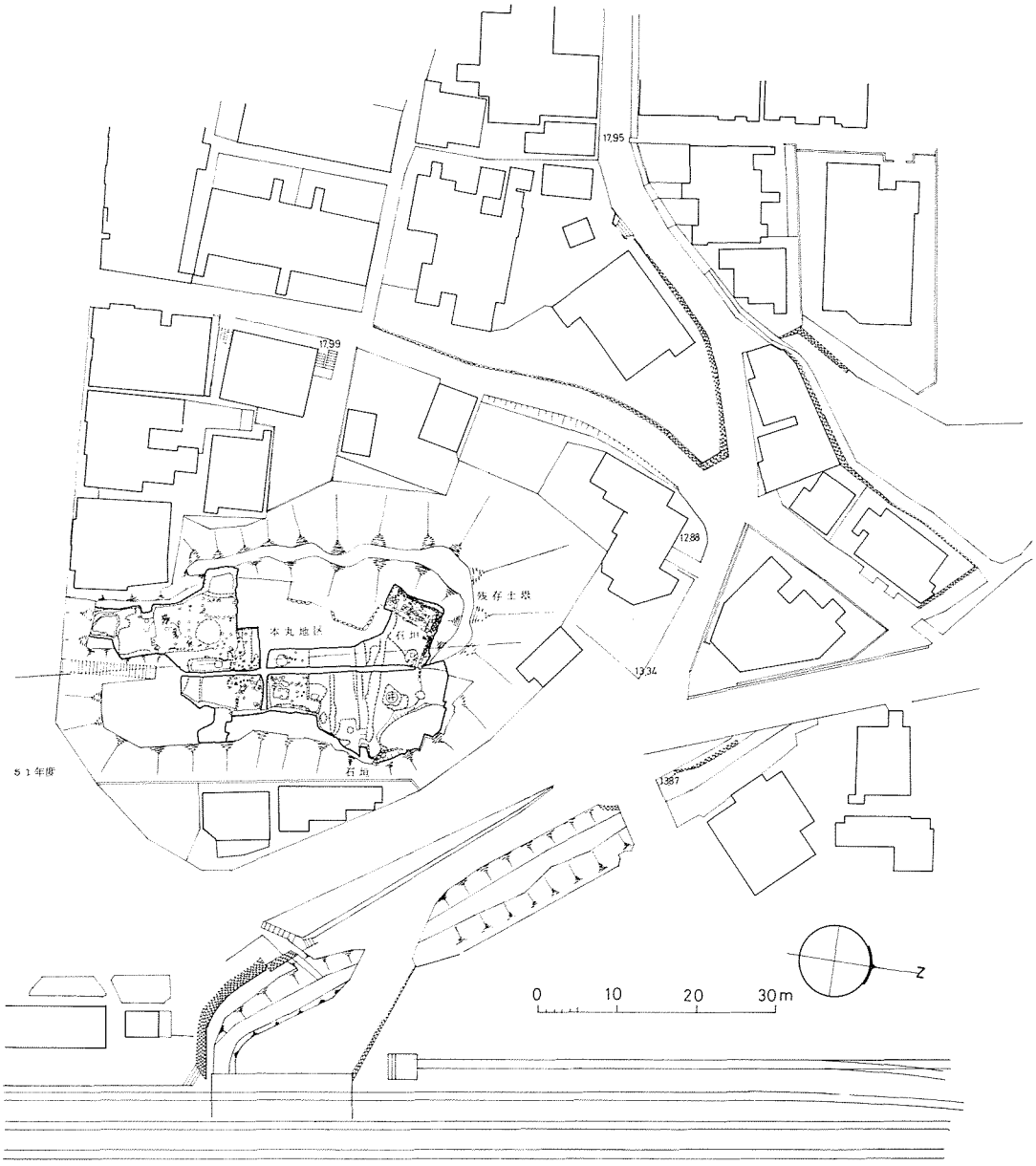
現場では作業に当られた橋本工務店の協力を得て、コンクリート擁壁と石垣面との間に砂を入れ、保存の処置が構じられている。

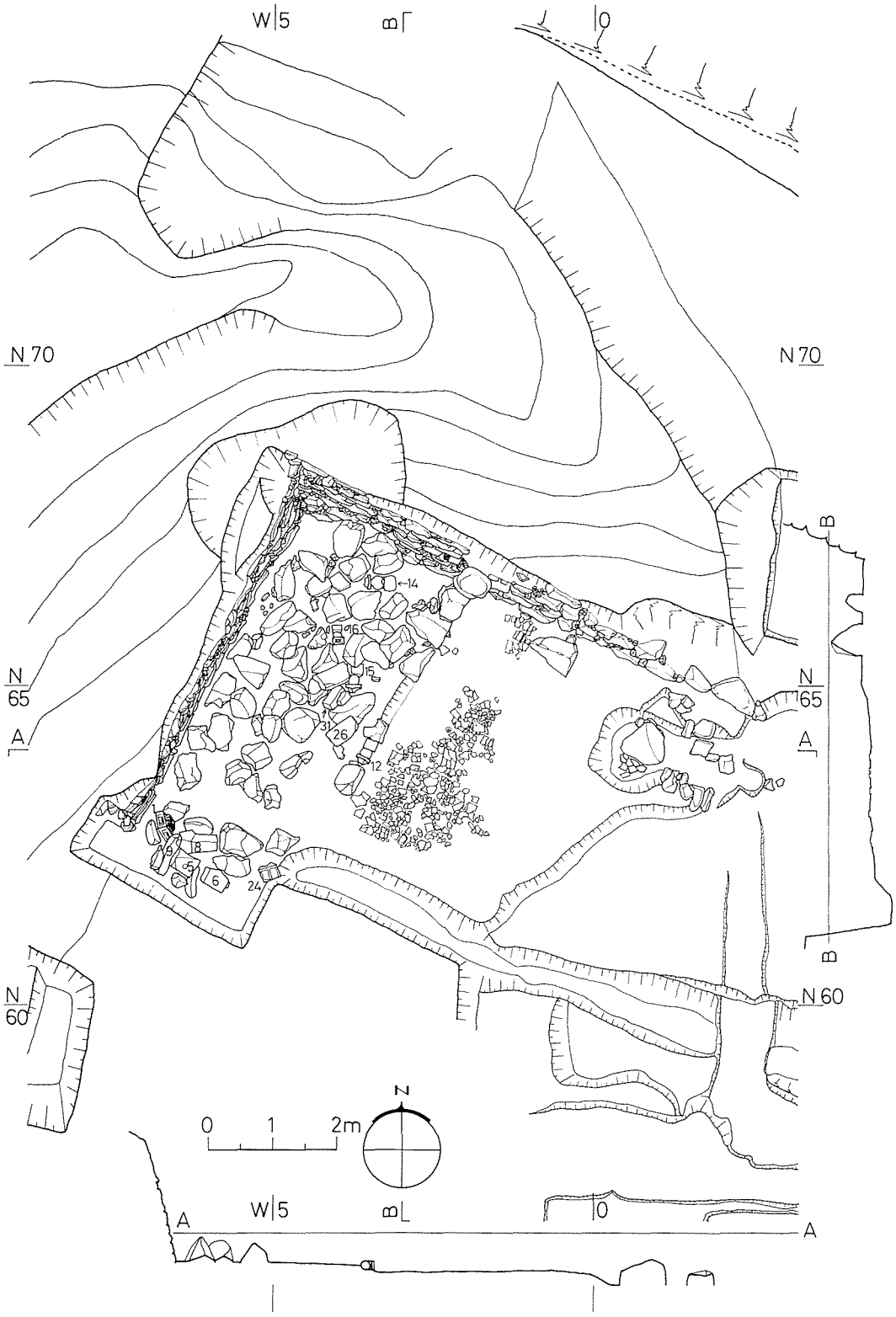
挿図３　　内堀南壁の石垣（北西より）



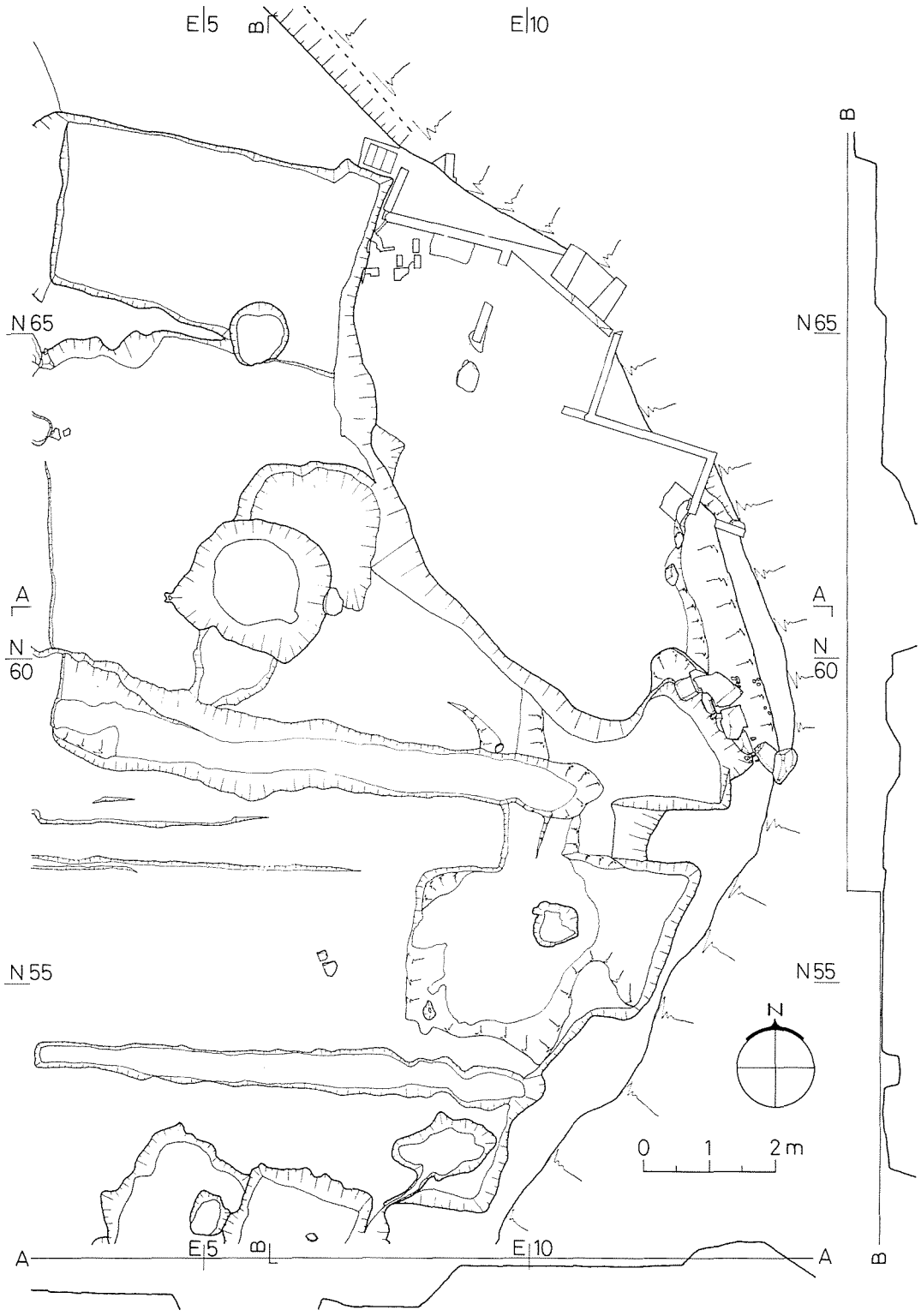
18.61
A
B1
B2
B3
18.45
C
南邪
18.93
旧有馬美容保育所
内堀南壁の石垣
西邪
18.35
50年度
19.75
19.48
旧兵村寺
西邪地区
BM.17.913
23.66
忠魂碑
国鉄伊丹駅

図面１　　調査地区図


17.95
17.99
17.88
17.34
17.87
残存土塁
本丸地区
石垣
石垣
5 1年度
0 10 20 30m
N

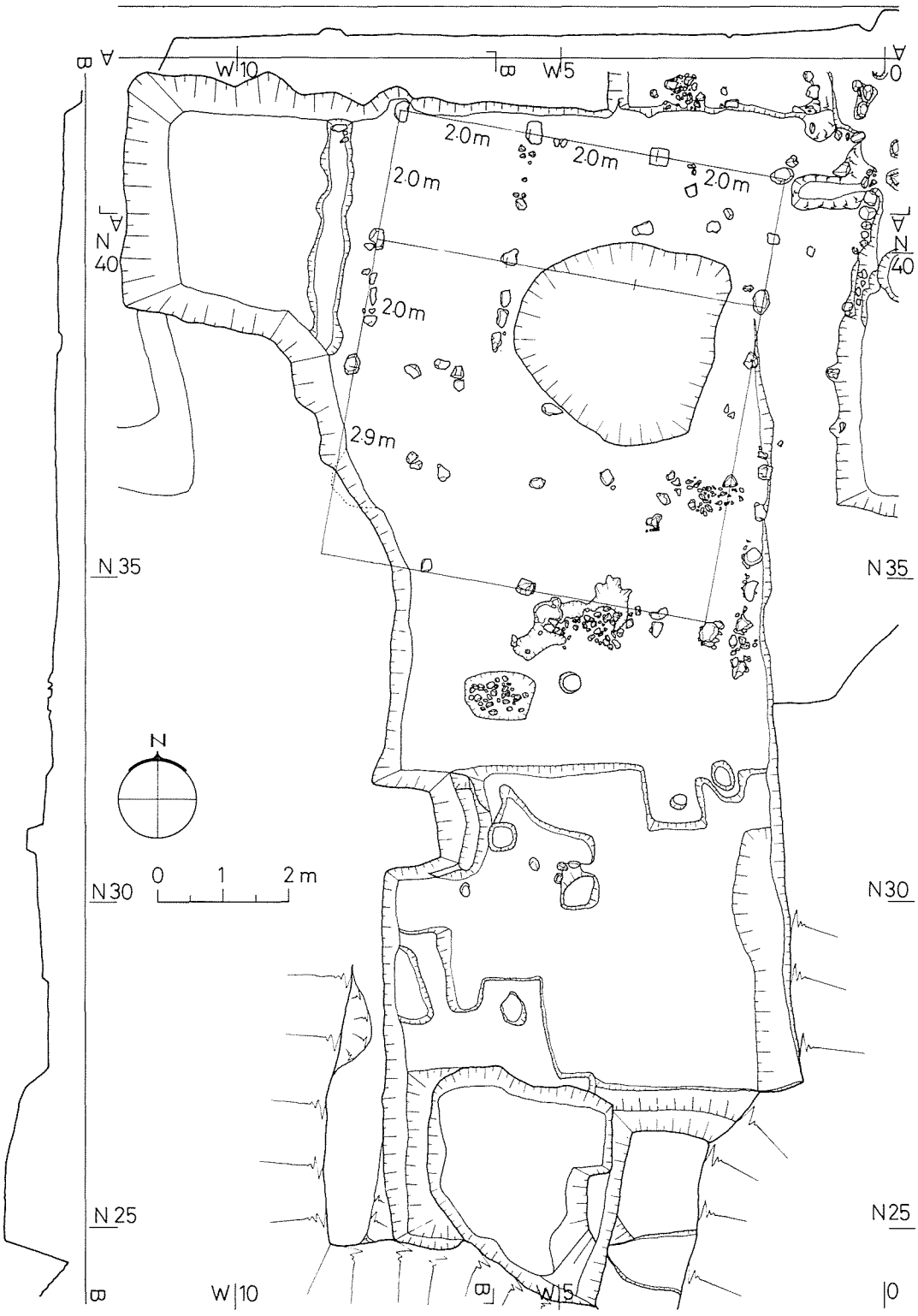


図面２　　本丸北西部　縮尺$\frac{1}{100}$

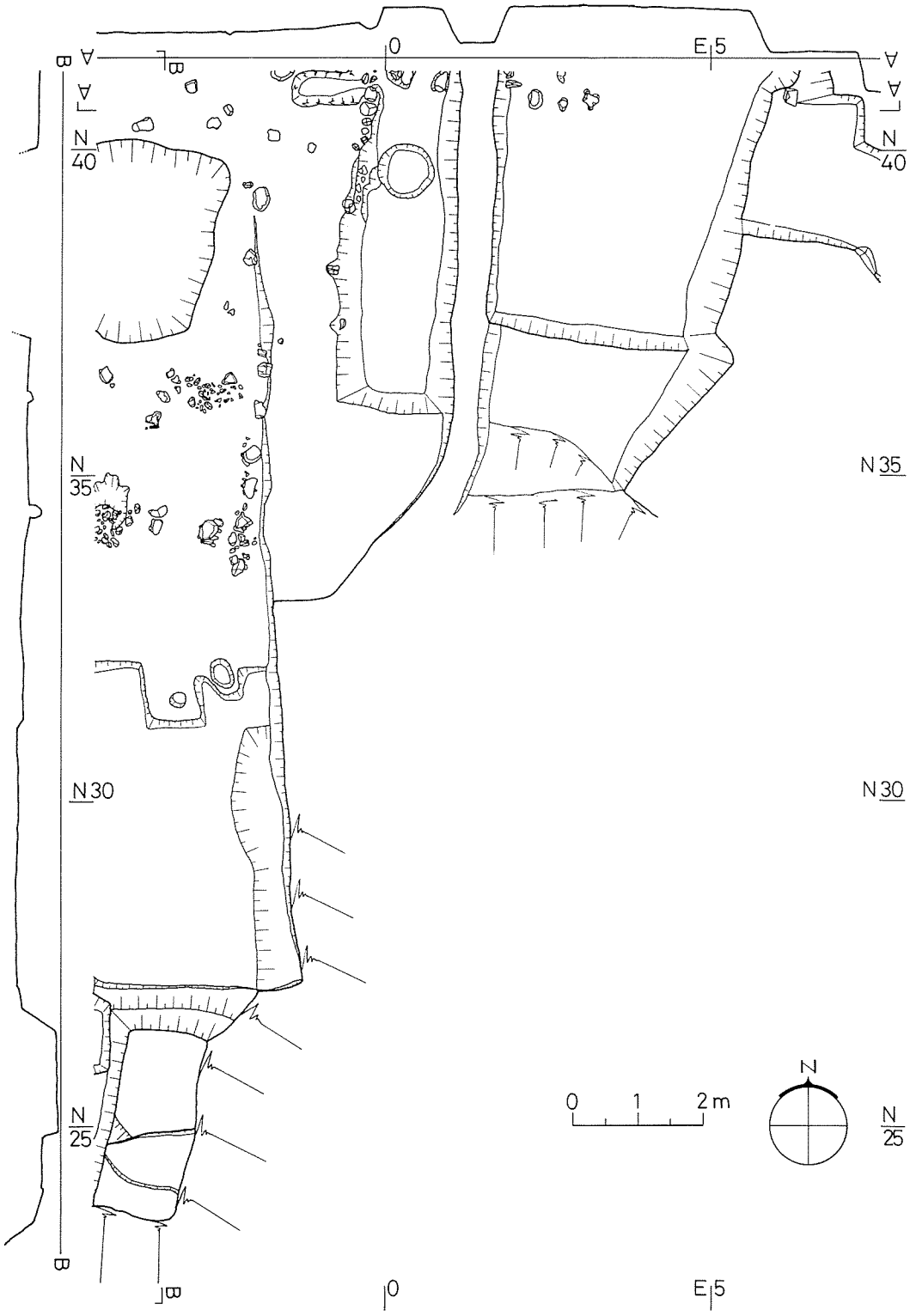


図面 3　　本丸北東部 $\frac{1}{100}$

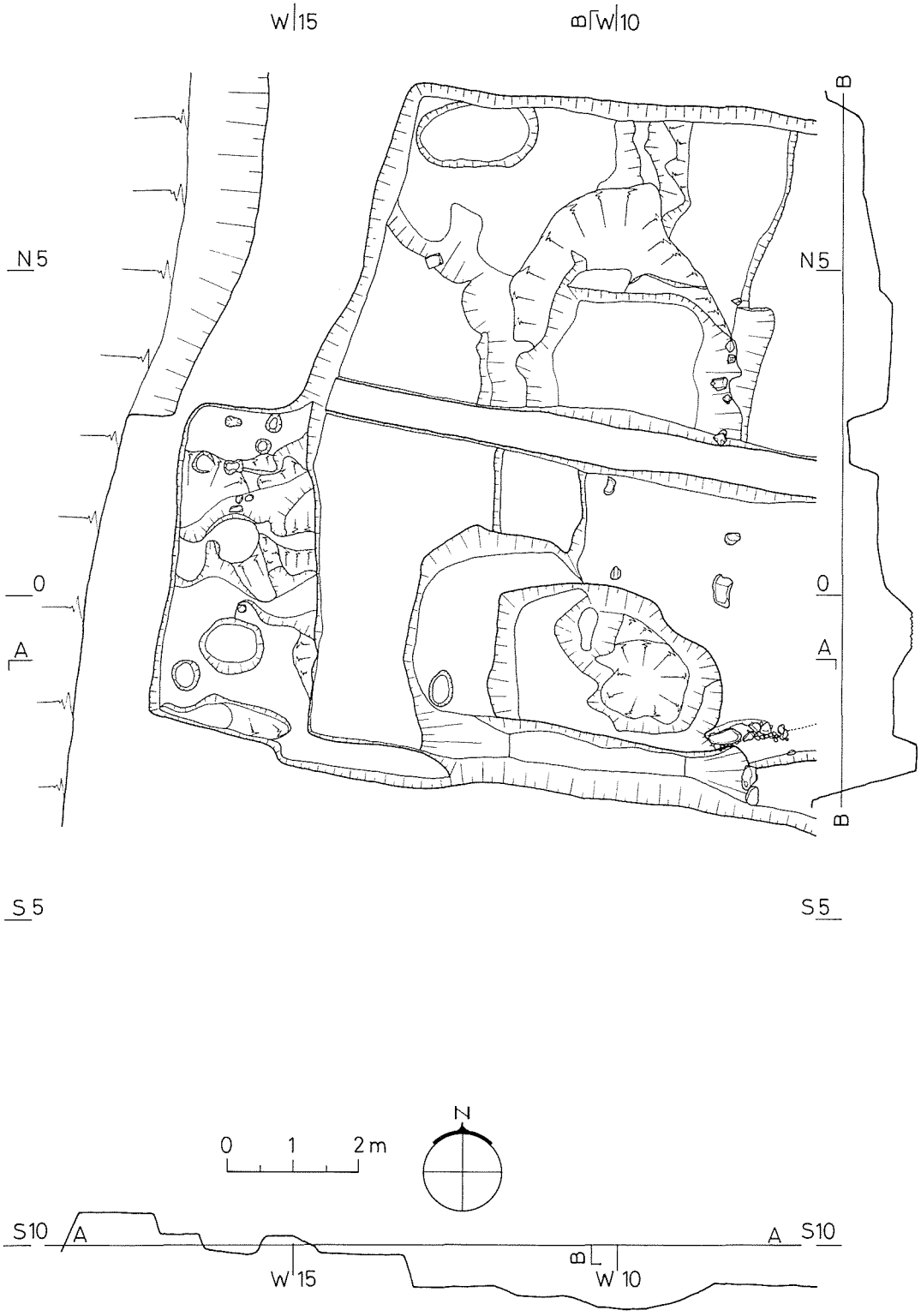
図面 4　　本丸中央部　縮尺$\frac{1}{100}$



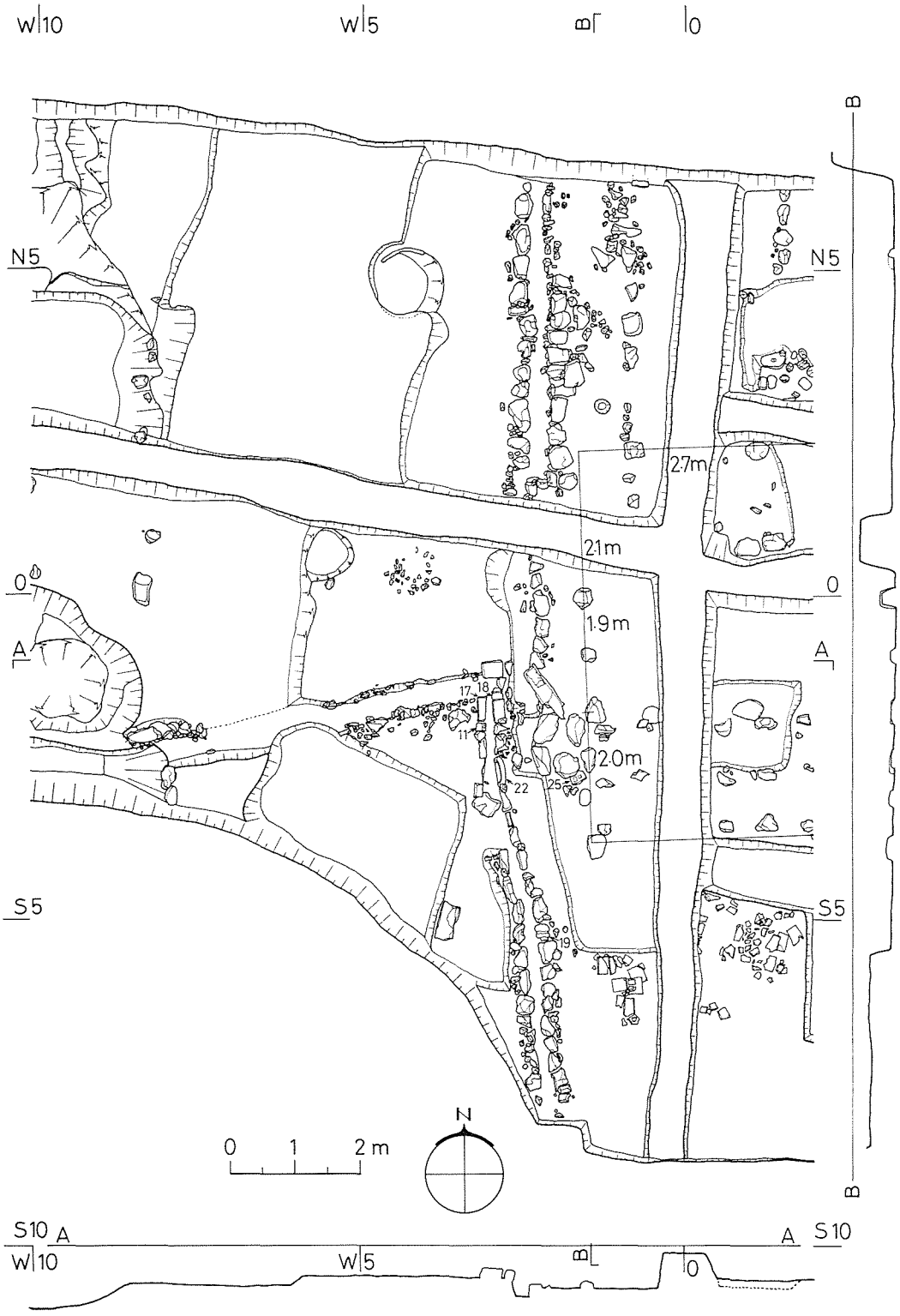
図面 5　　本丸南西部　縮尺$\frac{1}{100}$



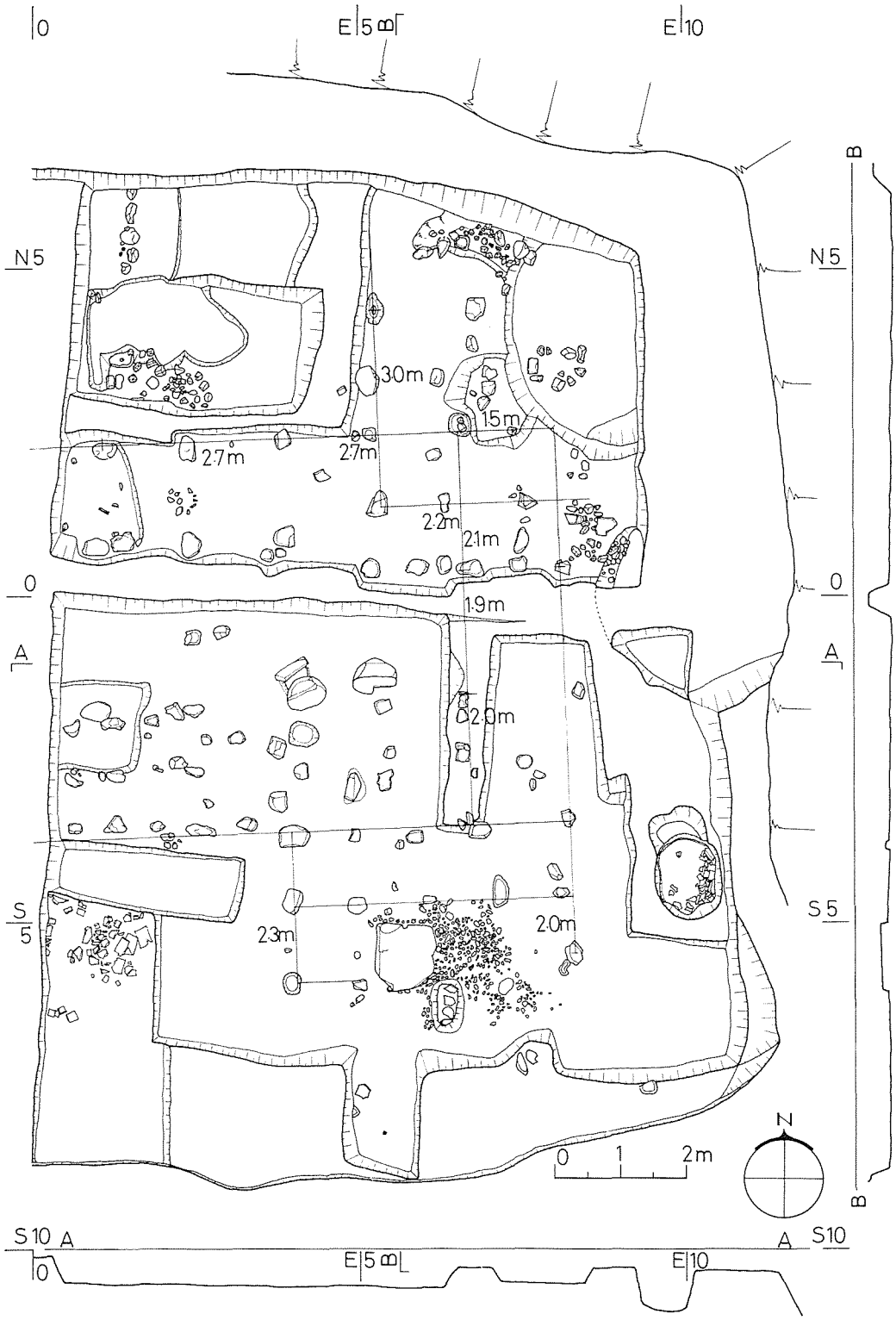
図面 6　　本丸南東部　縮尺$\frac{1}{100}$



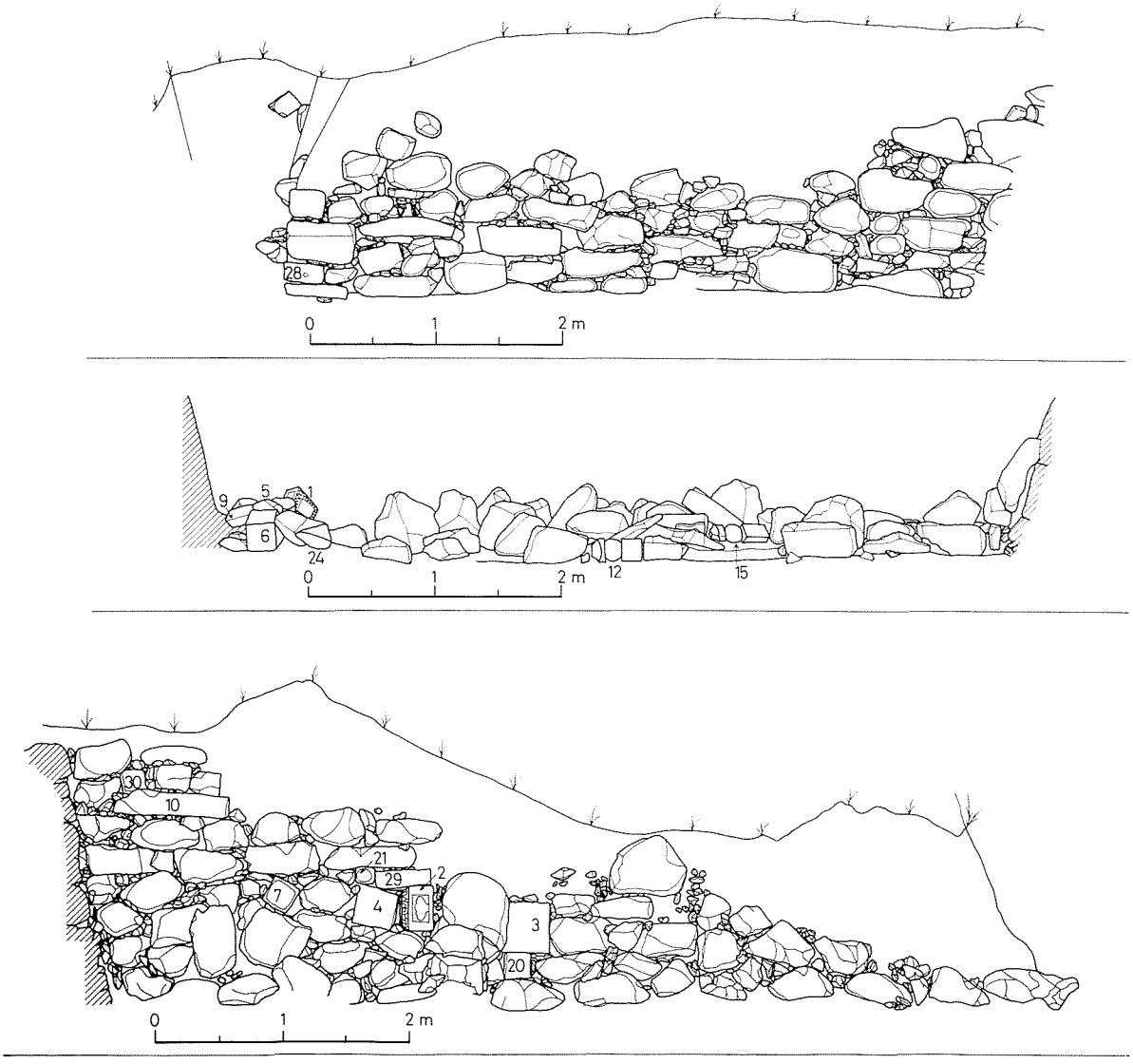
図面7　西郭北西部　縮尺$\frac{1}{100}$



図面 8　　西郭北中央部　縮尺$\frac{1}{100}$

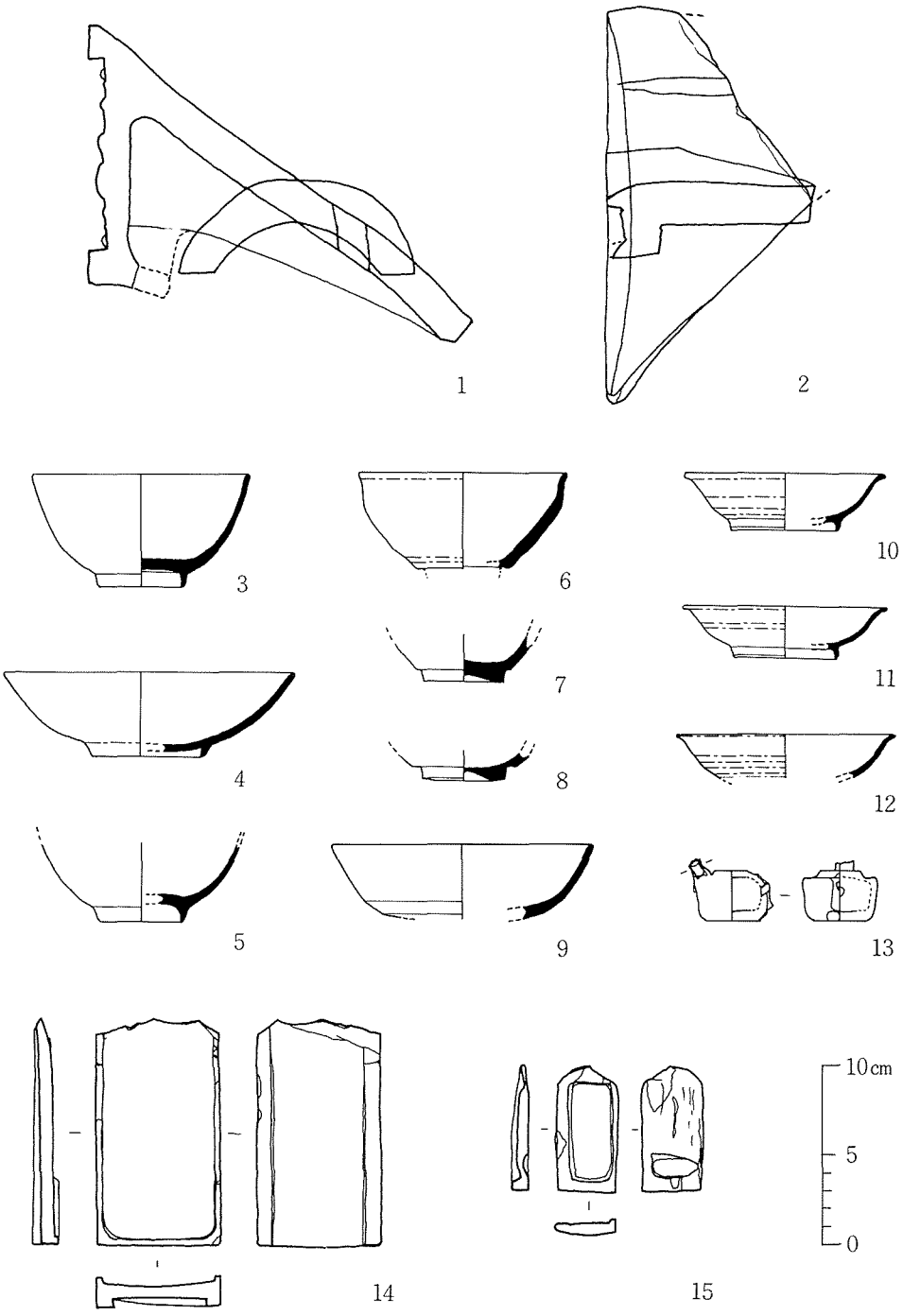


図面 9　　西郭北東部　縮尺$\frac{1}{100}$

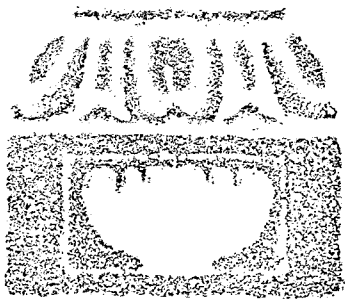


図面10　本丸石垣

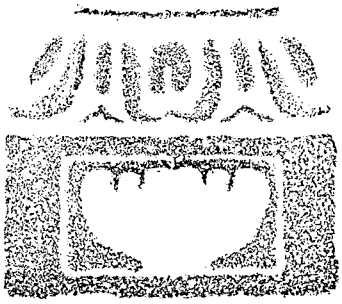
立面・西側（上）・崩れた石（中）・北側（下）



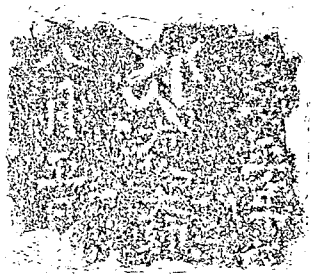
図面11　1　隅軒丸瓦　2　隅軒平瓦　3・4・5　染付茶碗
6・7・8　天目茶碗　9　青磁茶碗
10・11・12　白磁皿　13　水滴　14・15　硯



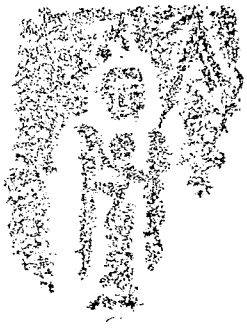
1



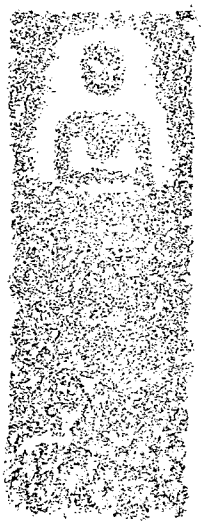
2



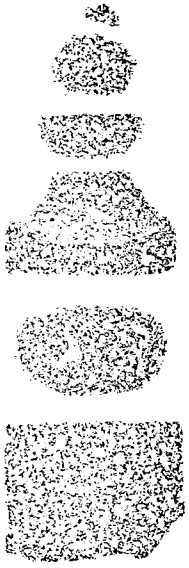
11



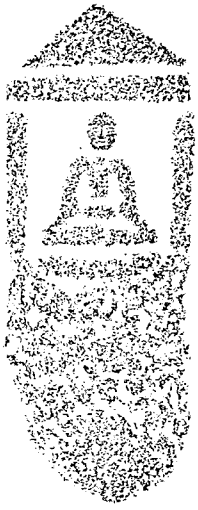
7



8

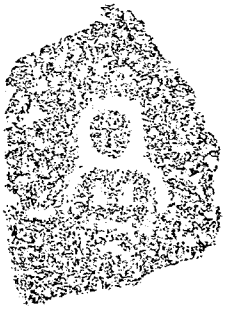


13



22

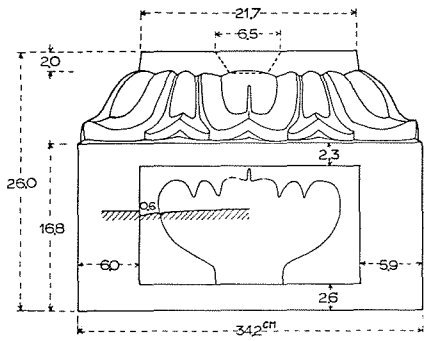
24



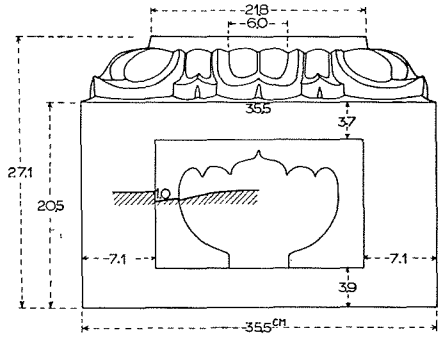
25

図面12　　1・2　宝篋印塔　　7・8　五輪卒塔婆

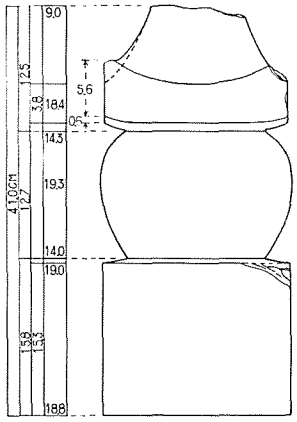
11・13　一石五輪塔　　22・25　弥陀一尊板碑　　24　双頭板碑



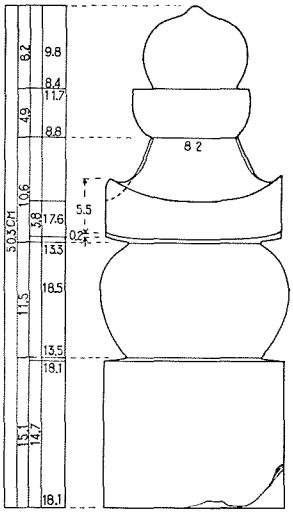
1



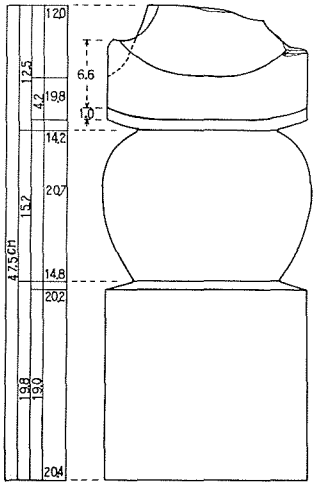
2



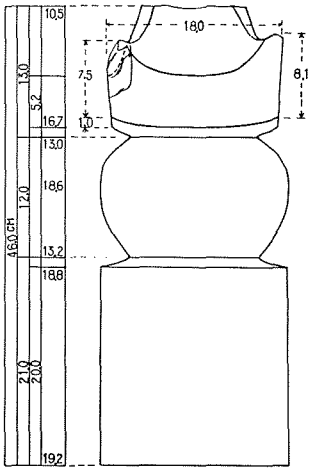
12



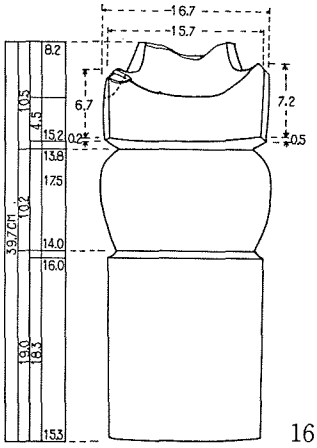
13



14

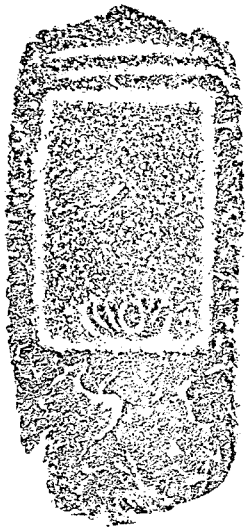


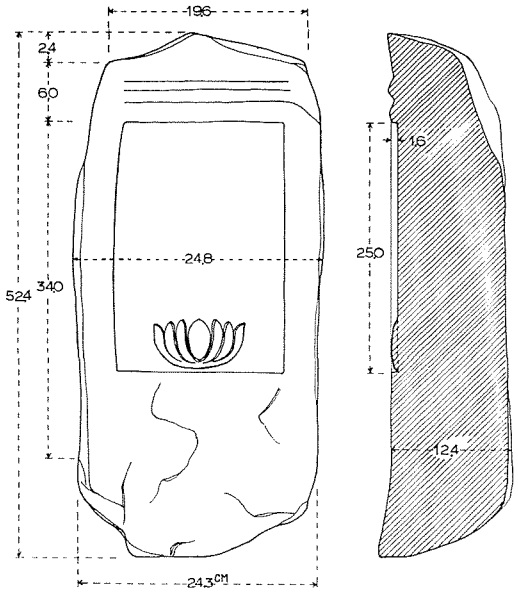
15



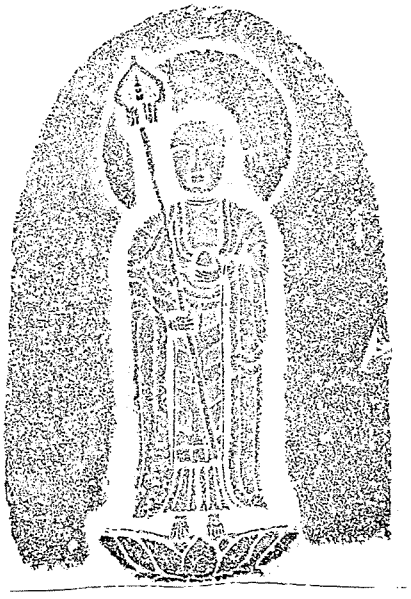
16

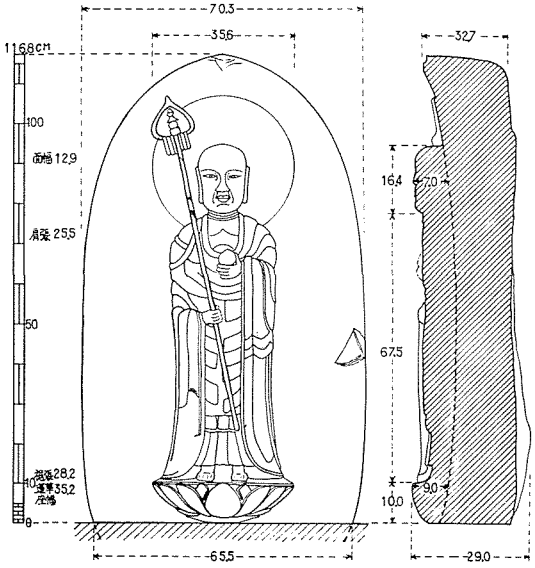
図面13　　1・2　宝篋印塔　　12～15　一石五輪塔





23





27

図面14　　23　板　碑　　27　地蔵石仏

図版1　西郭および本丸全景（南より）

図版２　　本丸全景（北より）

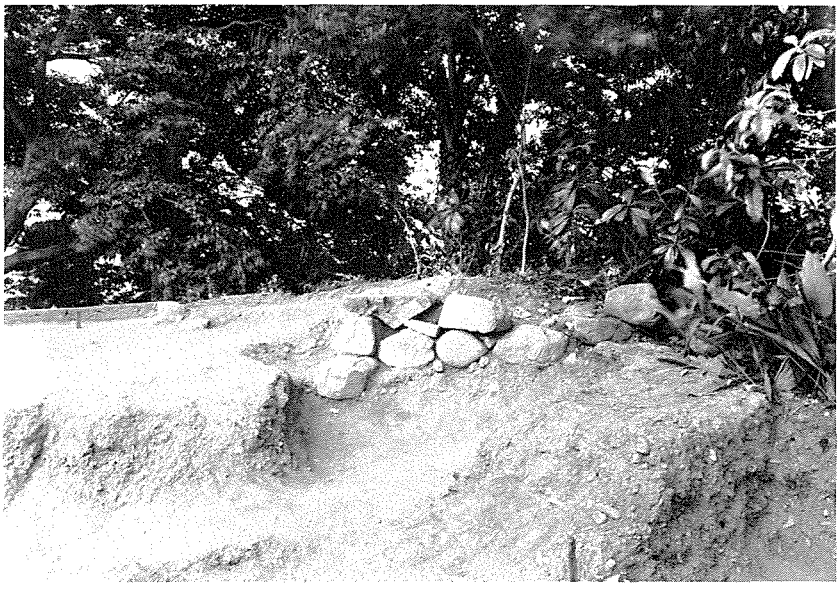
図版３　　本丸北部（伊丹城時代の礎石建物・南より）

図版４　　本丸・土塁および石垣（東より）

図版５　　本丸・北側石垣（南より）

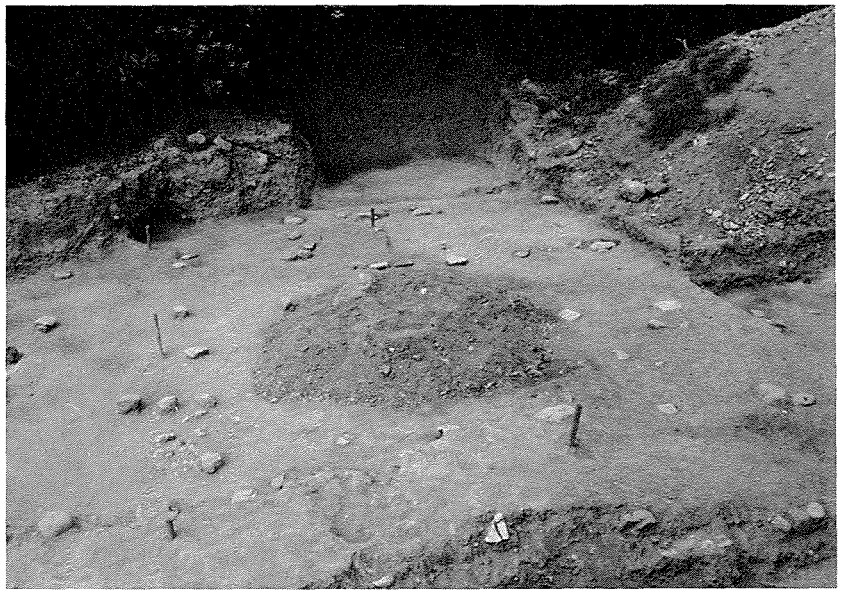
図版６　　本丸・西側石垣および崩れた石（東より）

図版７
本丸・土塁の断面（東より）



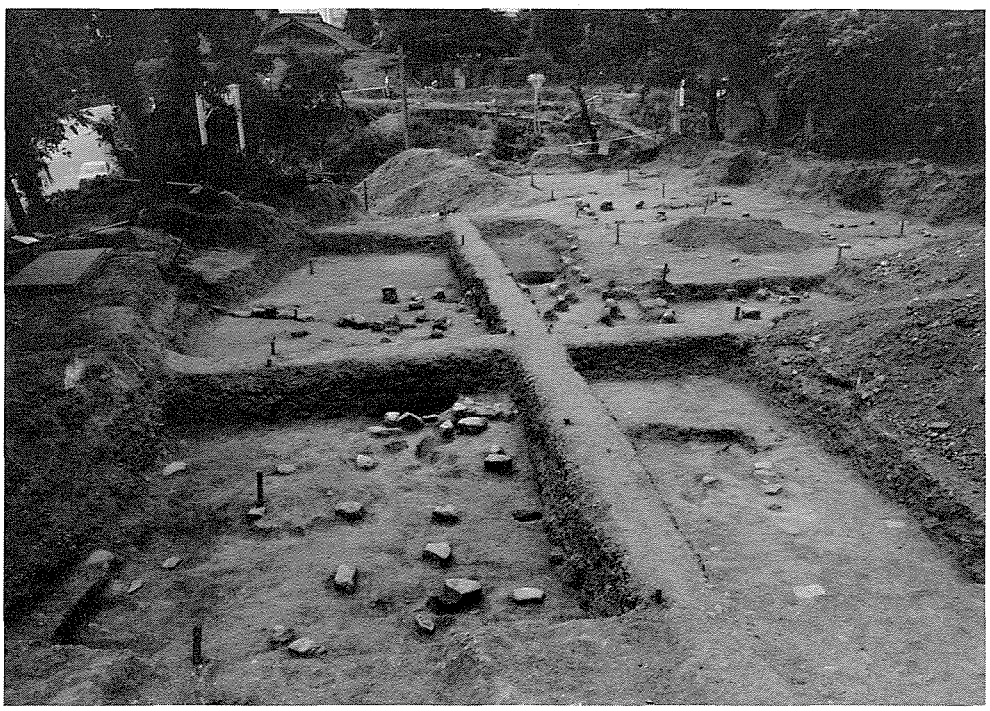
図版８　本丸・北側土塁東端の石垣（南より）

図版９　本丸・村重時代の井戸（南より）



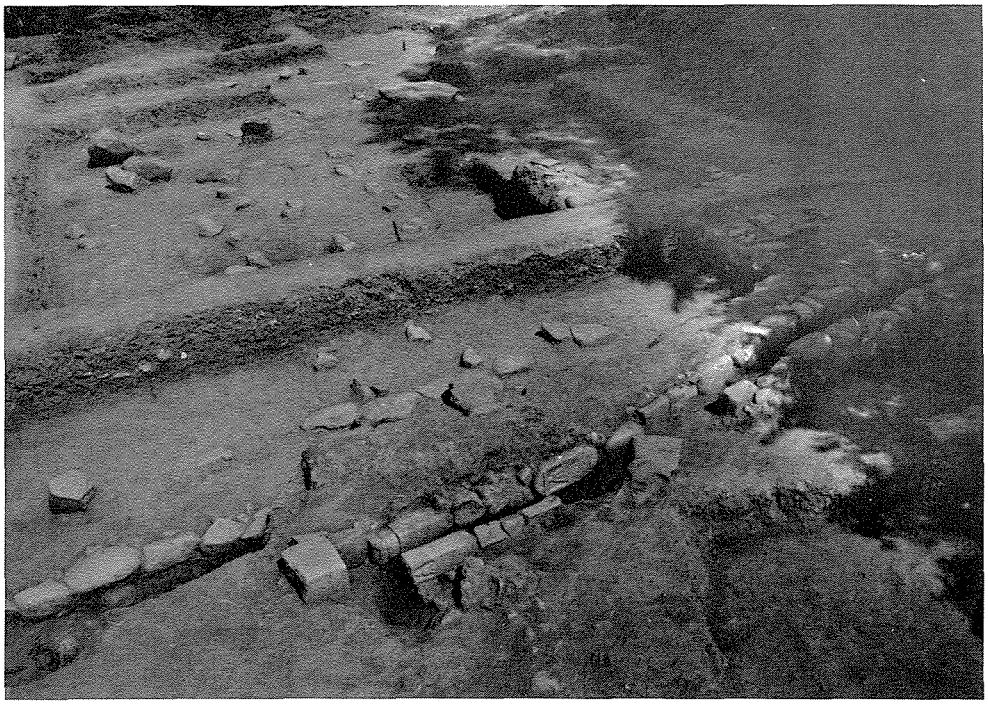
図版10　本丸・村重時代の礎石建物（東より）

図版11　本丸・村重時代の礎石建物の北側（南東より）



図版12　本丸・伊丹城時代の礎石建物(北より)

図版13　本丸・伊丹城時代の礎石建物(南より)



図版14　西郭・村重時代の溝(西より)

図版15　西郭・伊丹城時代の礎石建物(西より)

図版16　　西郭・西側土塁と池　（東より）

図版17　　西郭・村重時代の溝　（東より）

図版18　　西郭・伊丹城時代の礎石建物（南より）

図版19　　西郭・伊丹城時代の礎石建物（東より）

図版20　西郭・伊丹城時代の溝（西より）

図版21　西郭・伊丹城時代の礎石（北西より）

図版22　西郭・伊丹城時代の北端の縁石

図版23　西郭・伊丹氏居館時代の遺跡（北より）

図版24　西郭・村重時代の溝の曲り角（西より）

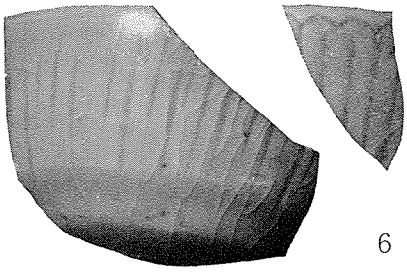
3

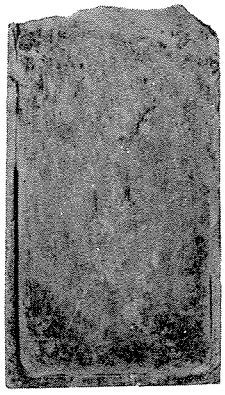
1

4

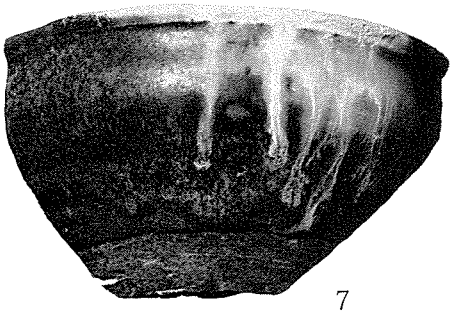
2

5


6


9

8

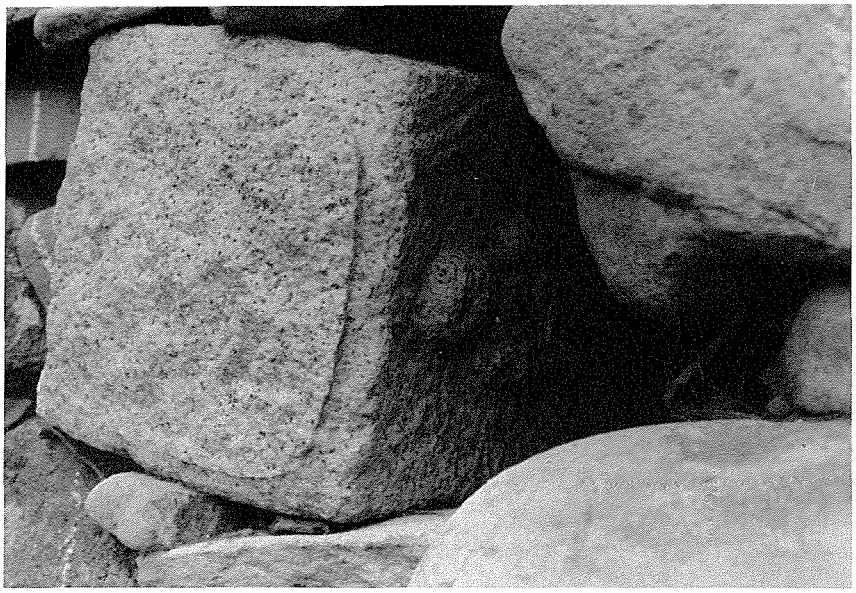

7

図版25　1　隅軒丸瓦　2　隅軒平瓦　3　三彩水鳥　4　水　滴
5　染付茶碗　6　青磁茶碗　7　天目茶碗　8・9　硯

図版26
宝篋印塔残欠
（基礎）1

図版27
宝篋印塔残欠
（基礎）2

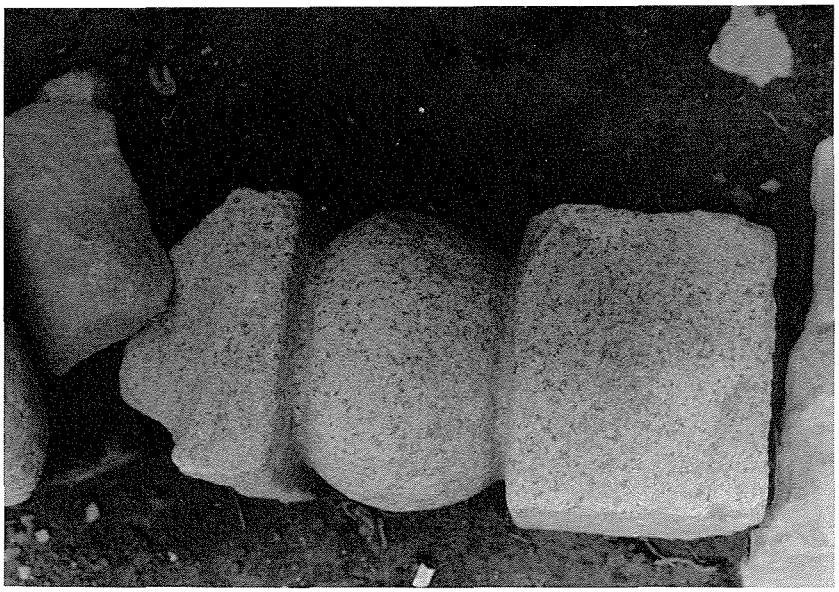
図版28
一石五輪塔残欠
（基礎）11
文安五年在銘



図版29
五輪卒塔婆残欠
（基礎）7

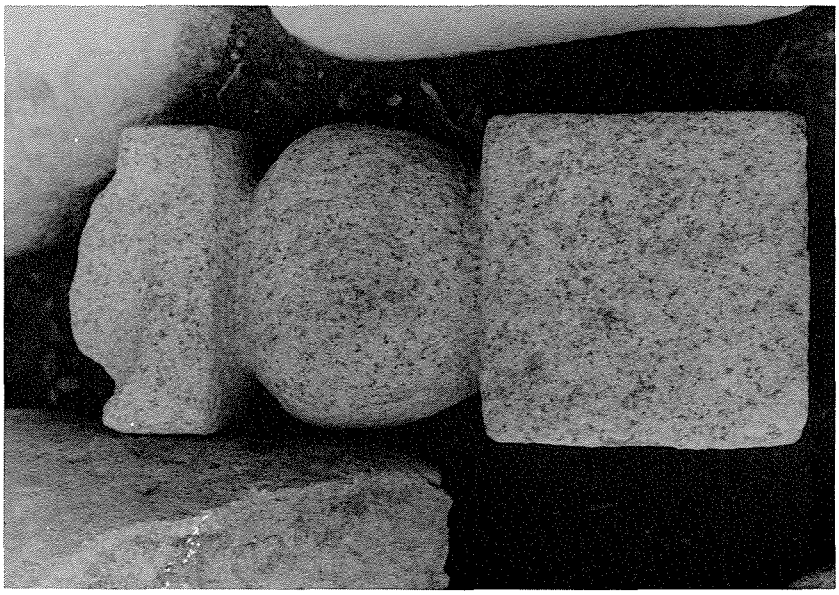
図版30
一石五輪塔残欠
（基礎）17

図版31
弥陀一尊板碑22



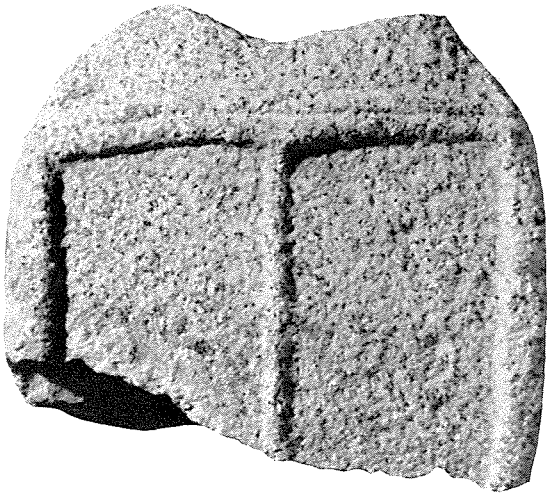
図版32

一石五輪塔12



図版33

一石五輪塔15



図版34

双頭板碑24